岐阜県文化財保護センター

研　究　紀　要

第　2　号

２０１６

岐阜県文化財保護センター

目　次

ふるさとの歴史に興味・関心がもてる出前授業のあり方
・・・・・・・・・・・・・・・・・岐阜県文化財保護センター授業改善建研究グループ　1
（吉田靖　河合洋尚　古屋寿彦　大本直人　佐竹正憲　笠井慎吾　井出大介）

添付資料
授業改善研究構想図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・別紙１
社会科授業指導　授業シナリオ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・別紙２～７

ふるさとの歴史に興味・関心がもてる出前授業のあり方

岐阜県文化財保護センター授業改善研究グループ
（吉田靖　河合洋尚　古屋寿彦　大本直人　佐竹正憲　笠井慎吾　井手大介）

1　はじめに

「この土器、こげで真っ黒だ。」、「こっちの土器はつるつるで気持ちいい。」、「さわると痛いくらい尖った石器だな。」、「全部自分たちでつくったのだ。」、「むかしの人ってすごいなあ。」、出前授業で聞く、児童生徒の素直な感想だ。児童生徒の反応は多様で、すべてほほえましい。

岐阜県文化財保護センター（以下「当センター」という。）の目的は、「岐阜県内の埋蔵文化財の発掘調査及び研究、出土品の適切な保存及び活用、埋蔵文化財保護思想の普及を行い、もって本県文化の振興に寄与すること」であり、これまでに多くの発掘調査成果を上げ、保存と活用を進めると共に、様々な講座や出前トークの開催によって埋蔵文化財保護思想の普及に努めてきた。特に、県内の学校と連携して「ふるさと岐阜」に対する関心と理解を深めていただくため、平成19年度からは、学校に出向いて授業を行う「出前授業」を実施しており、平成25年度までの7年間の実践によって多くの成果を上げてきたが、一方で、後述するような課題も散見された。これは、例年出前授業の担当者が単独で年間の活動を進める体制であり、なかなか複数の目で検討する機会がなかったことも要因の一つではないかと考えられた。そこで、平成26年度に当センターが開始した研究事業を契機に授業改善研究グループを発足させ、研究グループだけでなく当センター職員全員が授業を行いながら、平成26・27年度の2年間で、特に小中学校を対象とした「出前授業のあり方」について研究を進めることにした。（河合）

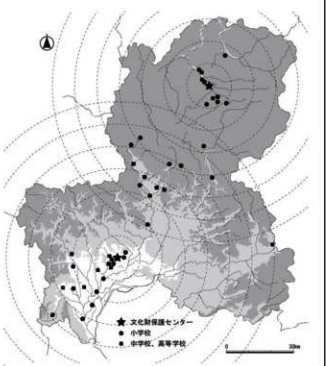


図1　平成21～25年度出前授業実施校位置図

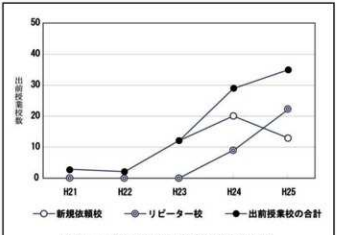


図2　平成21～25年度出前授業実施校の推移

2　出前授業の現状と研究主題設定の理由

図1は、平成21年度から平成25年度までの当センターの出前授業を実施した学校の位置を示す。この図から、県内の多くの学校で出前授業を実践していることが分かる。しか

し、実施地域が偏っており、まだ実践の少ない地域も多い。

図２は、当センターの出前授業件数の推移である。平成 21 年度から平成 25 年度までの実績から、年々増加していること、継続依頼校が多いことが分かる。継続校が多い理由の一端を「実施校アンケート」に見ることができる。

図３は、実施校アンケート回答結果をまとめたものである（平成 26 年６月末時点における実施 35 校のうち回答 23 校）。回答は、出前授業を実施した学級の担任から得ている。すべての質問事項において、「大変よかった」、「よかった」となっており、出前授業がニーズに対応できていることが分かる。具体的には、「授業者の授業雰囲気作り」、「詳しくわかりやすい説明」、「実物を見てふれる体験的活動」などに良さがあるとの回答を得ている。一方で、「児童生徒の発達段階によっては多少難しく感じる」、「説明が多い場面では児童生徒たちの興味・関心が薄れる」などという指摘も見られる。

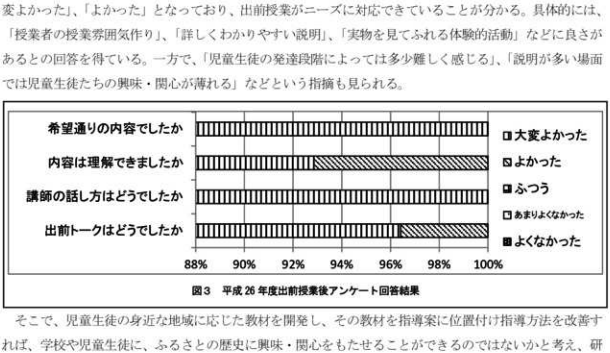


図３　平成 26 年度出前授業後アンケート回答結果

そこで、児童生徒の身近な地域に応じた教材を開発し、その教材を指導案に位置付け指導方法を改善すれば、学校や児童生徒に、ふるさとの歴史に興味・関心をもたせることができるのではないかと考え、研究テーマを「ふるさとの歴史に興味・関心がもてる出前授業のあり方」とした（別紙１「授業改善研究構想図」参照）。

（河合）

３　研究内容設定

研究内容は、以下の３点を設定した（別紙１参照）。

（１）地域・時代に合わせた教材と児童生徒に魅力的な資料の開発

児童生徒に、歴史事象をより身近なものに感じてもらうために、当センターが所蔵する多くの調査成果を県内６地域別に教材化・資料化する内容とした。

（２）指導案と板書計画の作成及び単元指導計画への位置付けの明確化

学習指導要領及び県内公立学校採択教科書の学習目標に準じて、当センター出前授業学習指導案のねらいを明確にし、単元指導計画への位置付けを検討するとともに、そのねらいを達成するために、現在実践している学習指導案を見直し、児童生徒がより興味・関心をもてるような展開を再検討する内容とした。

（３）ふるさとの歴史に興味・関心がもてる指導方法の工夫

児童生徒の学習活動を円滑に進めるために、指導・援助のあり方とその明確化や、児童生徒の思考の流れに沿った学習ノートの開発を行う内容とした。

さらに、実践が適切であるかを評価する方法として、児童生徒の感想を把握するために「授業ノート」を、学校側の感想を把握するために「実施校アンケート」を、当センター職員の指導案や指導方法に対する自己評価を把握するために「職員アンケート」を作成して分析することで、研究の成果と課題を明らかにしていくことにした。

なお、研究は２か年とし、１年目（平成 26 年度）は、研究内容の３点について検討・作成し、２年目（平成 27 年度）は、１年目に検討・作成した内容について出前授業を実践しながら修正していき、当センターの出前授業を確立させる計画とした。

（河合）

4　平成 26 年度の実践

（１）地域・時代に合わせた教材と児童生徒に魅力的な資料の開発

①教材の開発

児童生徒が、ふるさとの歴史について一層関心をもつことができるように、地域・時代に合わせた教材の開発を行った。

まず、地域・時代に合わせた教材の開発について紹介する。図４は、当センターの発掘調査成果のうち、出土品や遺跡の特徴から教材として活用するのに有効であると考えられる遺跡を抽出したものである。

6地域別分類

年代別分類	時代	城島	西郷	高須	甘南	東通	相撲
	縄文	戸入村平	戸入村平 山今宮前 鳴海村平 雲龍山	有明高師宮	富田清支 野宮 東野	大平	相撲内 赤坂平 上地野
	弥生	宿田東Ａ	荒尾南 今宮	小洞	北ヶ崎 納田	荒尾南 今宮	ウリガ平 中野大原平
	古墳	船山北 番場山	高南野	新宮神 深瀬前 小洞跡	赤坂 村ケ洞 油平茶白山	元三ヶ根 赤ヤノ原	石原 寺熊山崎 綾城平
	古代	広域野口	高須 角屋敷	鶴尾山城	鍋戸崎	納田	大ヒ 角屋敷跡
	中世	万見町屋 船山北	宿田城跡 二ノ井	宮竹 鶴尾山城	納田 上原本城跡	丸石 宮竹	三枝城 下田

＊地域に調査事例がない場合は、他地域の特徴的な遺跡とした。

図４　時代別・地域別提示遺跡抽出一覧

図４のとおり、時代別分類・地域別分類をすることで、どの時代・地域を対象とする出前授業を行う場合でも、児童生徒の興味・関心を惹きつけることができるように、住んでいる地域の遺跡の調査成果を活かした出前授業を提供できるよう教材化した。

教材の開発に当たって大切にしたことは、児童生徒が当時の人々のくらしぶりを実感できることである。出土品を通して当時の人々のくらしぶりに触れることができれば、それが歴史を学ぶ喜びを味わうことにつながり、さらには地域の歴史への関心が高まるのではないかと考えた。時代に合わせた教材の開発について２つの時代の学習授業案を紹介する。

一つ目は、縄文時代の例である。縄文時代は授業依頼が最も多く、これまでの実践も多い。そこで、これまでの実践における課題をもとに、持参する出土品を表１のように見直した。

旧指導案では、縄文時代において生活の様々な場面で使われた出土品を並列して取り上げていたが、改善した指導案では、「食」に関わる場面に使用された出土品に特化することにした。その理由は以下の２点である。

・「食」は、児童生徒にとって身近なものであり、当時の人々のくらしぶりを想像しやすい対象ではないかと考えたため。

・授業の終末に、縄文土器を提示することで、

表１　縄文時代授業持参出土品新旧対応表

旧指導案	→	改善した指導案
打製石斧、磨製石斧 石鏃、石錘 石錐、石匙 **生活の様々な場面で使われた出土品**	授業で活用する出土品	打製石斧、石鏃 石錘、磨石 **生活の中でも、「食」に関わる場面で使われた出土品**

石鏃を使って獲った「シカやイノシシの肉」、石錘を使ってとった「魚」、磨石で磨りつぶした「木の実」、打製石斧を使って掘った「イモなどの根菜類」が、その土器の中で煮炊きされていたことがイメージできると考えたため。

２つ目は、中世の例である。当センターのホームページに学習指導案を掲載しているものの、縄文時代、弥生時代、古墳時代への依頼が多くを占め、中世の授業は未実施である。その要因は、前者は学校で授業を行うに当たり提示資料が得にくく、当センター所蔵の出土品は資料として魅力があること、文献資料が比較的豊富に存在する古代以降は、提示資料が得やすく学習が組み立て易いことが考えられる。当センターは中世における出土品も多数所蔵しており、児童生徒がその出土品に触れる機会を提供できるよう、教材と学習過程の見直しを行った。中世における商業の発達においても、表２のように持参する出土品を見直し、学習の流れに組み入れた。

旧指導案で教材化した２種類の出土品のうち、古銭（中国貨幣）に焦点を当てた学習授業案を作成した。古銭を取り上げた理由は、以下の２点である。

・古銭は、当時の「お金」であり、それが発掘調査で出土したという事実は、児童生徒の関心を高めることにつながると考えたため。
・古銭が流通したことで、中世の日本において貨幣経済が浸透し、これが今の自分たちの生活とつながることから、児童生徒の関心が高まると考えたため。

②魅力的な資料の作成

出前授業の最大の魅力は、過去の人々が実際に手にしていた「出土品」を持参し、触れられることにある。児童生徒が出土品に触れた時の感動は容易に想像でき、それだけでも十分に価値のあることだと考える。しかし、その感動をさらにふるさとの歴史への関心につなげるための手立てとして、児童生徒にとって魅力的な資料の作成を行った。

具体的には、出前授業で持参した出土品から当時の人々の生活を想像したり、当時の人々の思いに触れたりするための手だてとなる資料である。

「日本で使われた中国の貨幣と商業経済の発達（中世）」の学習において作成した資料を紹介する。この授業で取り上げる出土品は古銭である。児童生徒が手にした古銭を当時の人々の生活とつなげられるようにするために、次のような資料の活用を考え

表２　中世授業持参出土品新旧対応表

旧指導案	→	改善した指導案
古銭（中国貨幣） 中国製陶磁器 **古銭、陶磁器の２種類の出土品**	授業で活用する出土品	古銭（中国貨幣） **古銭に焦点を当てて、商業の発達を考える**

写真１　『一遍上人絵伝』の提示

た。写真１は、『一遍上人絵伝』を児童に提示したときの様子である。この資料の中には、貨幣を使ってものの取引が行われている場面が２か所ある。絵が小さいためその様子が十分に把握できないことも考えられるので、拡大したものを準備しておき、児童生徒が自分の目で確認し、納得できるようにした。また、絵資料に描かれている貨幣は束になっていることから、貨幣が束になっている写真資料を提示し、実際の様子が想像できるように工夫した。

中世は、貨幣の流通によって貨幣経済が浸透する。現在の自分たちのくらしとつながる部分であり、貨幣経済が浸透していく過程については丁寧におさえ、さらに児童生徒が「貨幣を使って物の取引をする便利さ」を実感できるようにしたいと考えて資料を作成した。資料では、貨幣経済が浸透する以前の取引で使われていた米１俵と、貨幣 400 枚の価値が等しいことを図で表現する。さらに、その重さを比較し、同じ価値でも米 60kg に対して、貨幣 1.3kg と古銭の方が軽いことを捉えさせる。その上で、「貨幣を使ってものの取引をする便利さ」を実感できるように、馬１頭を買う場面を設定し、「馬１頭を買うためには、米５俵が必要です。どのくらいの重さになるだろう。」と具体的な場面で考えられるようにした。児童生徒とその場面を想像しながら、「貨幣だったらどうですか。」と尋ねることで、貨幣を使って物の取引をする便利さを実感させられると考えた。

地域の出土品に触れることで、当時の人々のくらしぶりを想像し、自分が触れた「出土品」と当時の人々の生活がつながり、ふるさとの歴史への関心が高まると考えた。（笠井）

（２）指導案と板書計画の作成及び単元指導計画への位置付けの明確化

①学習指導案と板書計画の作成

平成 25 年度までの授業実践で明らかになった出前授業の成果と課題を踏まえ、以下のような方針に従って指導案の検討を図った。

・出土品に触れる活動を中心に授業を組み立てる。授業者による説明は必要最小限とし、児童生徒の主体的な活動によって授業のねらいに迫る。また、出土品はできるだけ身近な地域から出土したものを用いる。
・授業の終盤に、授業を行う学校周辺の遺跡を紹介する場を設けることで、「ふるさと岐阜」に対する愛情を育てる。
・当センター職員全員が授業のねらいを達成させられるよう、学習指導案・板書計画・授業シナリオを作成し、教師と児童生徒の動き、予想できる児童生徒の反応、ねらいに迫る意見を引き出すための発問等を意図的・具体的に計画する。

この３点について研究を進めることで児童生徒が歴史学習に対してより興味・関心をもつことができると考えた。

ここでは、「古代」指導案の改善例について述べる。

改善前の指導案では、県内で出土した美濃刻印須恵器の観察に始まり、律令体制下の税制と、朝廷と美濃国との関わりに気付かせる前半部分と、県内で出土した寺の瓦と仏具を観察し、県内で仏教が広まっていたことを理解させる後半部分との２部構成になっていた。この授業では、土器を観察する活動が位置付けられてはいるが、この活動が授業のねらいに直接つながらず、ねらいの達成のためには授業者による解説を聞き、理解する作業が必要となるという課題がある。また、律令制度についての知識が定着していな

いと授業者による解説を理解することも難しい。この授業には、研究主題設定の理由で述べているように「児童生徒の発達段階によっては多少難しく感じる」と「説明が多い場面では児童生徒たちの興味・関心が薄れる」ことから、次のような改善を行った。

（a）学習指導案の見直し（図5）

出土品に触れる活動を通して、「当時の人々の工夫や努力」に焦点化できるよう、縄文・弥生・古墳・古代の各時代の土器を観察し、それぞれの特徴を捉えて比較する活動を位置付けた。観察した事実（土器製作における当時の人々の工夫や努力）から、奥に潜む社会的事象（生活の向上）の意味について考えさせることでねらいに迫ることができるようにした。仏教も律令制も古代を理解する上で欠かせないキーワードだが、聖徳太子や聖武天皇と結び付けやすい仏教のみを扱い、活動を通して得た「当時の人々の工夫や努力」を、仏具や瓦と結び付け、必然性のある学習となるようにした。終末では、学習した事実が身近な地域の歴史事象であることを知らせるために地域の遺跡について紹介する場を設けて、興味・関心を高めることとした。

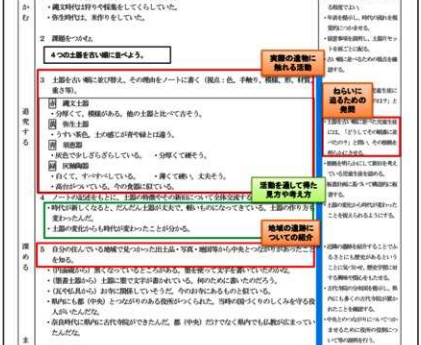


図5　学習指導案「奈良時代から平安時代の道具と国づくり」展開部分

（b）板書計画と授業シナリオの作成（図6・7）

土器の観察後の全体交流では、児童生徒から多くの意見が出されることが予想される。そこで、児童生徒一人ひとりの意見を大切にしつつ、スムーズに交流を進行するために、予想される意見を板書計画と授業

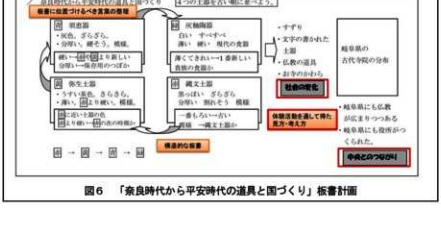
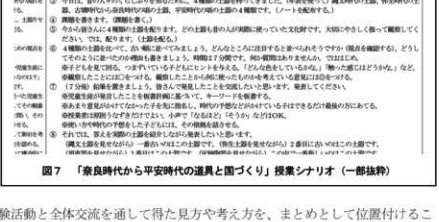


図6　「奈良時代から平安時代の道具と国づくり」板書計画

シナリオで整理した。板書を構造的に計画することで、児童生徒が自分たちの思考の流れを一目で振り返ることができるとともに、授業者が不足する意見を把握し、引き出したい意見をどのように問い返せばよいかがシナリオによって明確となり、授業をスムーズに行うことができると考えた。また、体験活動と全体交流を通して得た見方や考え方を、まとめとして位置付けることで、ねらいに到達しやすいと考えた。



授　　業　シ　ナ　リ　オ

①（　　時代）のカードを見せ）いままでの学習のおさらいです。［　　］に当てはまる言葉はなんですか。

②（ペンラ で）それぞれの時代の特徴を教えてください。

③ 今日は、昔の人々のくらしぶりを知るために、4種類の土器を持ってきました。（年表を使って）縄文時代の土器、弥生時代の土器、古墳時代から奈良時代の頃の土器、平安時代の頃の土器の4種類です。（ノートを配布する）

④ 課題を書きます。（課題を書く。）

⑤ 今から皆さんには4種類の土器を配ります。どの土器も昔の人が実際に使っていた文化財です。大切にやさしく扱って観察してください。では、配ります。（土器を配る。）

⑥ 4種類の土器を比べて、古い順に並べてみましょう。どんなところに注目すると並べられるでしょうか（観点を確認する）。どうしてそのように並べたのか理由も書きましょう。時間は7分間です。時間厳守はありませんが、でははじめ。
幼子どもを見て回る。「こまっていることがあったらこたえるよ。」「どんな色をしているのね。」「触った感ではどうかな。」など。
全員が、自分が考えたことを伝えられるように、観察したことから思ったことを考えていることを見届けながら、机間指導をする。

⑦（7分後）結果を聞きましょう。皆さんで発見したことを交流したいと思います。発表してください。
帝京大学出版会の資料に基づいて、キーワードを板書する。
全員が予想がはずれてなかったかを伝え合う。時代の予想などがはずれていたものを考えるだけ最後の方にあてる。
全授業者は原則うながす程度にとどめる。小学で「なるほど」「そうか」などはOK。
必要に応じて時代の予想をした子どもには、その根拠を話させる。

⑧ それでは、答えを黒板の上段から順番に並べていきたいと思います。
（黒板上段を見せながら）一番古いのはこの土器です。（物生土器を見せながら）2番目に古いのはこの土器です。
（黒板下段を見せながら）最近出てきた時代です。（須恵器を見せながら）この中で一番新しいのはこの土器です。

図7　「奈良時代から平安時代の道具と国づくり」授業シナリオ（一部抜粋）

②単元指導計画との整合性

学校の学習活動に確実に位置づくように、当センターの指導案が学習指導要領及び小中学校採択教科書の単元指導計画の中でどのように位置付くのか、どのように位置付けるとより効果的であるかを検討した。

（a）単元指導計画の検討

小・中学校採択教科書の単元指導計画は表3・4に示したとおりである。当センターの学習指導案は、原始から中世の学習において表中のとおり位置付けることができる。すべての時代において石器・土器・金属製品などの出土品を資料として用い、その観察からその時代の人々の生き方や特徴を捉える学習内容

表3　単元指導計画（小学校）

章	節/時数	時数	学習内容	センター指導案
導入	1	1	歴史博物館へ行ってみよう	
1 縄文の人たちと暮らしのくらし	1	1	こどもと遺跡と縄文のくらし	指導案1
	2	2	住居遺跡に来てみて	指導案2
	4	3	縄文と弥生のくらし	指導案2
	5	1	平野の地の分	
	6	2	石器のくらしぶり	
	7	6	巨木文明と東西	指導案3
	8	7	古墳遺跡と国土の様	
	9	8	平野のまとめ	
	10	9	小さな王国の誕生	
2 天皇中心の国づくり	11	1	世界文化遺産の出現	
	12	2	東海道と中国づくり	
	13	3	生活の改新と大陸の力の広がり	
	14	4	石の力で国を治める	指導案4
	15	5	出雲は無かれおろちを討ち伏せ、くにを	
	16	6	大陸の文化を学ぶ	
	17	7	奈良のくらし	
	18	8	日本海の交流が生まれる	
	19	9	平安のまとめ	
	20	10	武家時代の幕開けの頃は一年半行事盛り	
3 武士の世の中へ	21	1	武士の登場と武士のくらし	
	22	2	武士の登場と武士のくらし	
	23	3	農民と平民が働き	
	24	1	都鄙が東国を治める	
	25	2	世の矢面が立ってくる	
	26	6	平安のまとめ	
	27	7	鎌倉に残る鎌倉武士のエピソード	
4 今に伝わる室町文化	28	1	金閣と銀閣	
	29	2	書院造と茶町文化	
	30	3	明かり下の室町	
	31	4	生活の中の室町文化	指導案5
	32	5	平安のまとめ	
	33	6	室町時代の言葉の数々～南蛮船と国家鳥	

表4　単元指導計画（中学校）

章	節	時数	時数	学習内容	センター指導案
1 身近な地域の歴史		1	1	体験しよう	
		2	1	調べよう	
		3	1	調べよう	
		4	1	調べよう	
		5	1	考えのよう	
		6	1	考えよう	
2 古代までの日本	文明のおこりと日本の成り立ち	7	1	調べ導入	
		8	1	世界の古代文明と宗教のおこり	
		9	1	世界の古代文明と宗教のおこり	
		10	1	（世界の古代文明と宗教のおこり）	
		11	1	世界の古代文明と宗教のおこり	
		12	1	日本列島誕生と縄文文化	指導案1
		13	1	弥生文化と稲作伝播	指導案2
		14	1	古墳の時代	指導案3
	古代国家の歩みと東アジア世界	15	1	倭国人たちの政治文化	
		16	1	大化の改新	
		17	1	律令国家の成立と平城京	
		18	1	国風時代の人々のくらし	指導案4
		19	1	天平文化	
		20	1	東アジアの変化	
		21	1	摂関政治と文化の国風化	
		22	1	（東アジアのくらし）	指導案6
		23	1	鎌の生まれ	
3 中世の日本	武士の台頭と鎌倉幕府	24	1	鎌の導入	
		25	1	武士の成長	
		26	1	武家政権の成立	
		27	1	武士と民衆の生活	
		28	1	鎌倉時代の文化と国際	
	東アジア世界とかかわった中世の変動	29	1	モンゴルと鎌倉と日本	
		30	1	南北朝の動乱と室町幕府	
		31	1	東アジアとの交流	指導案5
		32	1	応仁の乱と荘園の生活	
		33	1	交易の広と戦国大名	
		34	1	室町文化とその広がり	
		35	1	（東アジア世界の銀貨体制と琉球王国）	
		36	1	（室町時代の生活文化と現代）	
		37	1	鎌のまとめ	

を構成した。さらに、朝鮮半島や中国から伝わった古墳時代の須恵器・古代の仏教・中世の宋銭を用いた学習を位置付けることで、東アジアとのつながりを取り上げる中学校の歴史学習にも対応できると考えた。

（b）単元指導計画における出前授業の位置付け

単元指導計画に、出前授業をどう位置付けると効果的であるか検討した。これまで出前授業を実施した学校では、単元指導計画における位置付け方が３通りあった。１つ目は、単元の導入時である。歴史学習の最初に土器や石器などの実物に触れる活動を通して、歴史学習に対する興味・関心を高めるねらいがある。多くは、縄文時代や弥生時代の学習指導案で展開している。２つ目は、単元の流れに即して行う授業である。これは、時代の学習に応じて位置付ける方法である。例えば弥生時代を学習する場合、前時に縄文時代の学習を終えており、既習事項を生かして変化の様子を比較できる。３つ目は、単元の終末時である。学習のまとめとして「地域にはどのような歴史があったのか」について、土器に触れる体験を通じて学び、教科書で学んできた歴史について地域の調査成果から捉えることで、より身近なものにすることができる。このように、位置付けが異なっても、ねらいを明確にして授業を進めることで、効果が上がると考えた。

（大本）

（３）ふるさとの歴史に興味・関心がもてる指導方法の工夫

①指導・援助のあり方と指導方法の明確化

授業を実施する上で重要なことは、当センターのどの職員が授業を実施しても限られた時間で学習のねらいに到達できるような適切な指導・援助である。指導・援助のあり方や指導方法を明確にすることによって、適切に授業を展開することができ、児童生徒に対し、ふるさとの歴史に興味・関心を高めることができると考えた。

（a）意欲を高めるための指導・援助

出土品に触れる活動を位置付けることから意欲的に取り組むことができる児童生徒が多いと思われるが、その意欲をさらに高め、スムーズに学習に取り組むことができる環境を整えるために多様な指導・援助について検討した。例えば、「古墳時代の文化」の学習における指導・援助は以下のとおりである。

・土器片の個別配付と観察時間の保障

すべての児童生徒が出土品に触れ、じっくり観察できるように観察用の土器片を個々に１セット配付した。また、観察する時間を確保することで、意欲的に学習に向かうことができると考えた。

・同器種による比較

弥生土器の高坏片と須恵器の坏部片というように、異なる時代の土器で類似する器種を扱うことにより、比較する観点が明確になり、意欲的に観察することができると考えた。

・色シールの活用（写真２）

配付する土器片に色シールを貼って視覚支

写真２　色シールを貼った土器

援することで、土器名を覚えなくてもその色を用いて書いたり話したりすれば、学習への抵抗感を和らげ、どの児童生徒も特徴を観察する活動に集中できると考えた。

・机間指導

観察時間に個々の様子を見て回り、どのような視点で観察しているか把握し、多様な視点で観察できるように言葉をかけたり、ノートに朱を入れたりすることで、自信を持って活動に取り組むことができ、意欲的に交流できると考えた。また、個人追究で意欲的に活動している児童生徒への認めを周りに広めることで、児童生徒により高まりたいという意識をもたせ、積極的な追究につながると考えた。

（b）指導方法の明確化

出前授業を実施するに当たり、当センターとして大切にしたいことは何かを明らかにし、授業者が適切に指導でき、学習のねらいが達成できるようにするために、学習指導案に沿って「授業シナリオ（別紙２～７）」を全６時間分作成した。

・導入

児童生徒の既習内容や、生活体験を交流するという導入にした。既習内容については、歴史学習に対する抵抗感を減らすために、「○○時代と聞いて、思いつくことはなんですか。」という発問に統一した。また、文字や図表などの資料に対して抵抗感を示す児童生徒に配慮し、出土品を入れたコンテナを示しながら中身に関心が向くような問いかけをすることで、すべての児童生徒がスムーズに学習に取り組み始められると考えた。

・追究

個人追究では、観察した項目の数値目標を掲げたり、「考古学者ランク」を示したりすることで、意見を書く意欲につながると考えた。

全体交流では、根拠を明確にして発言させることで、視点を絞って特徴の違いが比較しやすくなると考えた。さらに自分たちで話し合いながらまとめていく活動を仕組むことで、自分たちの力で見つけた特徴だと自覚し、学習に対する自信を生むと考えた。

深める過程では、工夫した理由やその技術のよさについて問いかけることで、よりよい技術の獲得は人々の生活の向上につながり、その営みは現在の私たちと共通していることに気付かせることができると考えた。

・まとめ

本時の振り返りを書く時間を保障し、机間指導によって学習のねらいに迫るまとめをしている児童生徒を把握し、意図的に指名して全体に広げることで、学習のねらいが達成できると考えた。

授業の結びでは、児童生徒の真剣に観察する姿、埋蔵文化財を大切に扱う態度、もっと調べてみようとする意欲などを評価することで、ふるさとの歴史に対する興味・関心を高められると考えた。

②児童生徒の思考の流れに沿った授業ノートの作成

児童生徒が自己の学びを整理するために、授業ノートを作成した（図８）。単位時間の学習の流れや、児童生徒の思考の流れを明らかにできるよう、以下の点について留意した。

・文字の量

児童生徒が抵抗なく書くことができるよう、授業者側からの指示や問いかけなどの文字を極力排したノ

ートを作成することで、思考の流れがスムーズになると考えた。

・レイアウト

導入での課題づくり、展開での観察事項の記録、終末でのまとめと振り返りというように、授業の流れに沿ったレイアウトとした。展開では文字・絵・模様の写しとりなどができるよう白紙とし、比較しやすいよう枠を並列に配置した。板書もこの配置で行った。

（吉田）

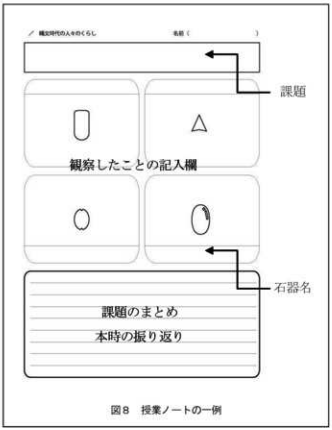


図8　授業ノートの一例

5　平成 26 年度の実践の成果と課題

出前授業における平成 26 年度までの懸案事項を解消すべく授業改善研究を進めてきた結果、以下の成果と課題があげられる。

＜成果＞

・当センター保管の調査成果を授業用資料として活用できるよう、児童生徒の興味・関心を視点にして時代別・地域別に教材化することで、提示する出土品やパネル類を授業者全体で検討しながら選定し、教材化・資料化することができた。（研究内容１）

・学習指導要領及び県内公立学校採択教科書の学習目標に準じて、当センター出前授業学習指導案のねらいを明確にし、単元指導計画への位置付けを検討することで、学校教育との連携を意識した学習指導案の作成ができた。（研究内容２）

・児童生徒の学習活動を円滑に進めるため、学習指導案に指導・援助のあり方を明確にして位置付けることで、多様な児童生徒に対応する心構えや積極的指導への意識付けを構築することができた。（研究内容３）

＜課題＞

・出前授業実践をもとに研究を進めていないことから、授業の展開、児童生徒の思考の流れなどが十分把握できているとは言い難い。次年度の実践を踏まえながら学習指導案や提示資料など全体を改善しながら研究をさらに進めていく必要がある。

・出前授業は当センター職員全員が行うため、授業改善研究グループで検討した内容について、当センター職員に周知していく必要がある。次年度当初に授業の展開方法やその意図について全体で周知する機会を設け、内容について検討していく必要がある。

次年度は、当センター職員の協力を得つつ複数の目で検討していくことで、県民のニーズに応えることができる授業を、実践をもとに確立していきたいと考えている。

（河合）

6　平成 27 年度の実践

平成 27 年度は、平成 26 年度の取組みをもとに、延べ 54 校、90 クラス、2,290 人（平成 27 年 12 月末現在）を対象に出前授業を実施してきた。

（1）　実践１「縄文時代の人々のくらし」の具体と考察（A小学校６学年の実践）

①「食」に関わる石器に特化したこと（研究内容１）

この実践では、縄文時代の「食」に関わる石器（打製石斧、石鏃、石錘、磨石・叩石）を取り上げ、実物に触れながらその特徴を捉え、用途を考えることを通して縄文時代の人々の生活の様子を考える学習を行った。石器は、その特徴と縄文時代の食べ物とを容易に関連付けできるものとして、以下の４つに絞った。

- **打製石斧・・・根菜類を採るために穴を掘る道具**
- **打製石鏃・・・動物を狩るための道具**
- **石錘・・・・・魚を獲るための道具**
- **磨石・叩石・・種実類をすりつぶすための道具**

当センターの所蔵する出土品の中から、「食」に関わる石器で、その石器の特徴を把握しやすいものを精選し、箱に１つずつ入れてグループごとに配付した（写真３）。児童たちには、(ア) すべて食べ物を手に入れるための道具であること、(イ) 形や大きさ、重さなどの特徴を比較すること、(ウ) 自分たちの生活と関連付けて考えること、という追究の視点を提示し、グループで話し合いながら石器の用途を考える活動を位置付けた。

写真３　配付した石器

グループ追究事例１では、話し合いの中で「形」をもとにして「使い方」を考える姿が見られた。Ｃ１は打製石斧の略長方形型と刃部を有することに着目し、「手で握ることができる大きさ」、「周縁部の鋭さ」から「動物と戦うための道具」に結び付けている。その意見に対しＣ２は「動物のすばやさ」から「打製石斧を狩りの道具とするのは難しい」としている。Ｃ２の意見を受けてＣ３は「打製石鏃の先端の鋭さ」から「狩りの道具として適切」と判断している。「どうしてそう思うのか」というＴ１の切り返しによって「木に括り付けて、弓で飛ばす」という使い方に言及させることで、Ｃ２の賛成意見を引き出し、考えを共有することができた。

【グループ追究事例１】

Ｃ１：（打製石斧を握り）持ち方はこうかな。なんか戦えるね。
Ｃ２：うさぎとか獲るのかな。（狩るのは）難しそうだ。
Ｃ３：（打製石鏃をもって）（うさぎを獲るなら）こっちのほうがいいよ。尖っているし。
Ｔ１：どうしてそう思いますか。
Ｃ３：弓矢の矢のようだから、木に括り付けて、弓で飛ばして、動物を狩ることができる。
Ｃ２：弓矢いいね。これ（石鏃）は、動物を狩るための道具になるね。

グループ追究事例２では、話し合いの中で「特徴」をもとにして「使い方」を考える姿が見られた。Ｃ５・Ｃ６は「磨石の重さ」、「表面の磨痕」に他の石器との比較中に気付き、Ｃ７は「磨痕の集中部」があることに気づいている。どのように使用するとそのような特徴が現れるのかを考え、実物を手に取って動作を行うことでＣ５・Ｃ７の気付きにつながったといえる。

【グループ追究事例２】
Ｔ２：磨石と他の石を比べて触り心地はどうですか。
Ｃ５：おっもい。表はつるつるしているよ。
Ｃ６：これ（打製石鏃）は触ったら切れそうだけど、磨石はつるつるして持ちやすい。
Ｃ７：けど全部がつるつるしているわけじゃないよ。ざらざらのところもある。
Ｃ６：なんでここだけつるつるなのかな。触って気持ちいい。
Ｃ全：うーん。
Ｃ５：こすったんじゃないの。
Ｃ７：木の実、どんぐり！これでこうやって（動作）。
Ｃ８：すりつぶすんじゃない。名前も磨石だし。
Ｃ５：ドングリを割ったり、すりつぶしたりしたんだと思う。

つまり、「実物に触れる」ことで実際の使い方について体験を通して考察し、「食に関する石器に絞る」ことで、より自らの生活経験と重ねて考えることができることから適不適を判断しやすいという、児童が主体的に取り組むことができる教材であるといえる。

②児童生徒の思考の流れに沿った授業ノートの作成（研究内容３）

単位時間の思考の流れがノート１ページ分に表れるよう授業ノートを作成した。

図９は、石器の特徴を端的に書き（事例中の下線部）、見つけた事実をもとにその用途を考えようとしている（事例中の破線部）。また、矢印を使って見つけたことと考えを結ぶことで、自分の考えの根拠として分かりやすく示すことができている。さらに、板書をノートと同じ配置にすることで、どの石器について交流し、深めているのかが視覚的に意識でき、授業では仲間の考えと自分の考えを関連付けながら発表する姿が見られた。これは、石器のイラストをノートに位置付けることで、観察したこと（石器の特徴）を書き込むことができ、事実をもとにその事象の意味を追究することにつながったと考えられる。また、言葉だけでなく加工痕跡や模様などを図化する児童もおり、児童の多様な気付きに対応できたことが興味・関心を高めることにつながったと考えられる。

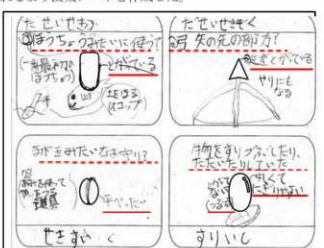


図９　ノート事例１

図 10 は、個人追究で自分の考えを明らかにした後に交流することで、自分の考えが変容したことを実感できた例である。個人追究では、打製石斧周縁部の鋭さから武器（動物を獲る道具）と考えていたが、交流を通じて事実を理解し、驚きをもって感想に記している。事実について理解を深めさせるためには、（ア）個の認識を明確にすること、（イ）明確にした認識について根拠をもとに確かめること、の２点が重要である。さらに認識がずれていれば事実と向き合った時に驚きが生まれ、驚きを伴うことはより認識を深めることにつながると思われる。ノート事例２は上段でこの認識（ア）を明確にし、交流後の感想で事実を理解する（イ）ことができており、児童の思考の流れに即したものであるといえる。しかし、授業者

側からの指示や問いかけなどの文字を極力排したノートを意図的に作成したことで、思考の流れをスムーズにしたよさがある反面、授業者の指示の聞き漏らしによる作業の停滞や石器の名称記入の不徹底などが見られたことから、授業者の指示の徹底方法やノートに掲載する指示文章等について再検討する必要がある。　（井手）

（2）実践2「弥生時代の人々のくらし」の具体と考察（B小学校6学年の実践）

①学習過程の改善と単元指導計画への位置付けの明確化（研究内容2）

（a）展開と板書の工夫

今回の実践では、弥生時代の人々について「2つの時代の土器を比較して特徴をつかむ」ことで「土器のつくりの変化に気付き」、その変化が「当時の人々が生活改善の工夫や努力をしてきた」につながり、地域からの出土品を使用することで「ふるさとの歴史に興味・関心をもつ」ことをねらいとしている。当センターは具体物を提示することができるため、学習過程の中でも「2つの時代の土器を比較して特徴をつかむ」ことに重点を置いて学習を進めることとした。そのため従来までの、

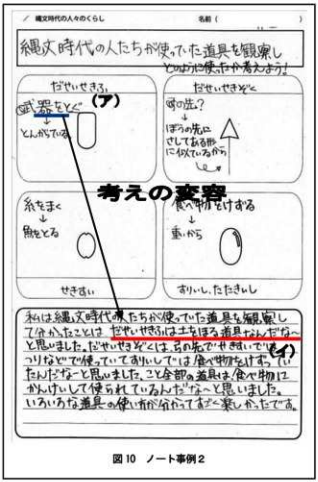


図10　ノート事例2

弥生土器と縄文土器を比べよう。

と設定していた学習課題を、

弥生時代の人たちが使っていた土器は縄文時代の人たちが使っていた土器と比べてどのようなちがいがあるか見つけよう。

と、焦点化・具体化することとした。さらに、板書計画（図11）を作成し、学習過程の流れや、2つの時代の土器の特徴の違いが視覚的に理解できるよう工夫した。そうすることにより、授業者が児童に何を見つけさせるとよいかが明確になり、適切な指導ができるようになった。また、児童は実物を目にしたり手にしたりすることに加え、授業者からの意図的な発問によって、ねらいにつながるような多くの特徴を見つけ出すことができた。また、授業者による机間指導での児童への認めや励ましによって、見つけ出した多くの情報に自信をもち、全体の場で積極的に交流することができた。積極的な交流によって特徴の違いについて共通理解を図ることができ、土器の特徴の変化が生活様式の変化や当時の人々の工夫や努力に関わっているという本時のねらいに的確に迫ることができた。

（b）単元における本時の役割の明確化

本時は、小学校で実践する場合、６年生社会科「縄文のむらから古墳のくにへ」の単元に位置づく学習活動である。児童はこの学習活動に入る前に、縄文時代と弥生時代のくらしについて学習をしていることが多い。この場合の学習活動では「２つの時代についての学んだ知識を、実感を伴った理解へと深めること」、「今後の歴史学習に対して興味・関心を喚起すること」をその役割として設定している。

そのために、(ａ）で述べたような学習活動を展開したり、後述する資料を工夫したりすることに重点をおいた。また、事前に学級担任からどのような学習を進めてきたかを聞き取ったり、導入で児童に縄文時代や弥生時代についてどのような知識をもっているか尋ねたりした。なかには、「社会の授業はきらい。」と答える児童もいたが、興味・関心を喚起する学習活動を行ったことで、事後のまとめでは「楽しかった。」と感想をもつ児童が多く見られた。

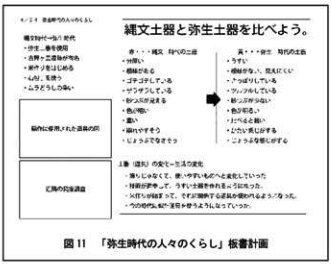


図 11　「弥生時代の人々のくらし」板書計画

写真４　縄文土器に触れる様子

写真５　土器を比べる様子

②追究意欲を高めるための指導方法の工夫について（研究内容３）

（ａ）教具の工夫

先の課題を提示した後、一人１セットずつ、「5000 年前の土器と 2000 年前の土器です。」と伝えながら弥生土器と縄文土器の土器片を配付した。本物の出土品を手にすることで、児童は目を輝かせ、それぞれの土器の特徴を見つけようと、黙々とノートに向かう姿が見られ、その後の追究意欲につながった。

土器を配付する際には土器の種類（名称）を伏せておき、それぞれ赤色と黄色のシールを貼るだけとした。このことにより、多くの特徴を見つけ、その特徴を根拠として土器の種類を探っていこうとする社会的事象の意味を追究する意欲を喚起させることができた。児童は一つずつ土器片を手に取ったり、両手に２つの土器片を持って比べたり、なかには手触りや見た目だけでなく、においを嗅ぎなが

ら何か特徴はないかと探ったりする姿も見られた。

このようにして、「薄い・厚い」、「ザラザラ・ツルツル」、「硬い・柔らかい」、「粒が粗い・細かい」など、それぞれの土器の特徴を比較しながらノートにまとめ、「薄く作れるようになった」、「精巧に、丁寧に作れるようになった」、「細かい粒だけを選別できるようになった」など、時代の変化と当時の人々の工夫や努力についての根拠を、土器を通して明確にしていくことができた。

（b）資料提示の工夫

個人追究では一人１セットの土器片を配付し、全体交流では、全員で一つの土器片を見ながら考えを深めたり、広げたりするようにした。

その際に活用したのが視聴覚機器である。「赤のシールの土器は砂粒が粗いけど、黄色のシールの土器は細かいです。」というように発言する際、自分が観察した土器片をモニターに映し出すようにした。この提示の仕方によって、全員で土器の特徴についての共通理解を図ったり、実際に自分の手元にある土器片を再確認したりしながら理解を深めることができた。そして、それぞれの土器の特徴をまとめ、それを根拠にしながら土器の種類を確定させたり、土器の違いが生活様式の違いにつながっていることに気づかせたりすることができた。学校において視聴覚機器が整備されつつある現在、調査の成果を視覚的に捉えさせるコンテンツを開発していくことは、教育普及において有効な手立てであると考えられる。（古屋）

写真６　大型モニター

（３）実践３　「古墳時代の文化」の具体と考察（Ｃ小学校６学年の実践）

①導入から課題化について（研究内容２）

この学習を行った学級では、古墳時代は未学習であったため、導入部分で「弥生時代」と「古墳時代」の新旧関係を確認した。次に持参した土器が約 2000 年前のものと約 1500 年前のものであることを説明し、板書に位置付けた。その後、古墳時代には「新しい土器」が作られるようになったことを紹介し、弥生土器と比べてどのように新しくなったのか分かるようになることを課題とした。２種類の土器には約 500 年間の差があるという事実を授業の冒頭で認識させたことで、「500 年もの

写真７　鉄製品の観察の様子

間にどんな変化があったのか」という意識を途切れさせずに学習することができた。

②提示資料について（研究内容１・３）

実際に土器を観察することを伝えた際に、児童から大きな反応があった。また、持参した出土品が岐阜県で出土したものであることに対しても、児童は強い反応を示していた。児童生徒が学習対象との距離を感じることは歴史学習の課題であるが、身近な地域で出土した出土品を教材として用いることは、この距離感を取り除き、意欲的に学習に参加する手段として非常に効果的だと言える。また、授業の終盤で、地域の古墳の紹介と実際の出土品の提示を行った。この遺跡は児童にとって身近な場所ということもあり、大きな反応が起こった。自分たちの身近な場所に大きな力をもった人物が存在していたことへの驚きや感動がまとめの記述にも表れていた。本時の授業のねらいである「土器製作当時の人々の工夫や努力という視点から時代の変化に気付き、大きな力をもつ人物の存在を知ることでふるさとの歴史に興味・関心をもつ」ことを達成するために、最適な資料選択であったと考えられる。

③土器の新旧判別について（研究内容２）

弥生土器と須恵器との新旧判別の根拠について、授業者が想定していた内容があまり出なかった。弥生時代の学習が終わった時点での本時の授業であったため、弥生土器との色の違いから判断している児童が多かった。そのため、当時の人々の工夫や努力という視点からの意見があまり出てこなかった。交流の序盤に、「黄色シール（弥生土器）は表面が滑らかなので、技術が進歩しているから黄色シールの方が新しい。」という意見が出た。この後、どちらが新しいか全体に尋ねると２つに分かれた。双方からその根拠を尋ねると、青シール（須恵器）については「曲線を作るのは難しい。」という意見はあったが、「堅い。」という意見はなかった。黄色シールについては「表面が滑らか。」という意見が多数だった。その後は意見が停滞したため、「ロクロ」の導入について説明すると、土器に入る横向きの線とロクロとを関連付ける意見が出た。この発言をきっかけに全員が青色シールの方が新しいことに納得した。当時の人々の工夫や努力について気付かせたい場合、小学生には難語句である「ロクロ」について説明するのではなく、それに気づけるような発問を位置付けることや、観察用土器はねらいの達成に適したものを選ぶことが重要である。

写真８　土器を比べる様子

（佐竹）

（４）実践４　体験重視型「土器を比べよう」の具体と実践（D小学校特別支援学級の実践）

今年度、特別支援学級から「土器を比べよう」の実施依頼があった。特別支援学級での実践は初めてであったことから、学級担任と事前に綿密な打合せを行い、児童に地域の歴史に対する興味・関心を高められるよう、体験型学習活動を取り入れることにした。

①提示する出土品や資料の意図的選定（研究内容２）

縄文時代、弥生時代、古墳時代、中世の４つの時代の本物の土器を手にとって色や手触りの違いを体感することで、歴史への興味・関心を高められると考えたため、提示する出土品は通常学級と同じものを使用した。ただし、各自に配付する土器片の器種や部位は可能な限り統一した。統一することで児童の考える足場を共通化でき、意見交流やまとめの段階で土器の違いによるつまずきや混乱を極力排することができると考えた。また、完形品の選定にあたっては、手にとった土器片と色や文様が類似するもの、児童が経験から語ることができるような各時代の生活用具としての特徴が表れているものとした。このことにより土器の特徴の照合作業が容易になり、各時代の土器の特徴を捉えやすくなったと考えられる。

「土器に触れる」活動を重視し、授業ノートは使用せず、提示資料は必要最小限とした。提示資料として使用したものは当センターが調査した遺跡紹介パネルである。理由は校区内にある遺跡であることや出土した状況を視覚的に捉えさせることで、児童の興味・関心を高められると考えたためである。パネルに写っている遺跡全体の写真を見て、「あっ、ここ知っているよ。」と気付いたり、縄文土器深鉢の完形品を出土状況写真とともに提示したときに「こんなふうに土器が埋まっていたのだ。」とつぶやいたりする姿から、児童が歴史をより身近に感じ、興味・関心を高めることにつながったと考えられる。

写真９　縄文土器に驚く児童

②「違い」比べと「同じ」見つけ（研究内容３）

導入では、４つの時代の土器片を各自に１点ずつ時代順に配付し、「この中で一番古い土器はどれか分かるかな。」と問いかけた。この発問によって、「古さの根拠」を見つけるために、目を近づけたり触れたりして「違い」を探す姿が見られた。大きさや色、形、文様などの「違い」への気付きを認めた後、一番古い土器（縄文土器深鉢）の完形品を提示した。「この一番古い土器とそっくりな土器のかけらはどれかな。」と問いかけた。児童は、「似ている根拠」を見つけるために、土器片を手に持って完形品に近づけて「同じ」見つけに集中した。このように発達段階に合わせて、「違い」を見つける活動と、「同じ」を見つける活動を分けて焦点化することで、思考の流れがスムーズになり、意欲的に活動ができた。（吉田）

（５）実践５　クラブ活動に対応した「日本で使われた中国の貨幣と商業経済の発達」の具体と実践（E小学校クラブ活動の実践）

①導入に出土品を提示するよさ（研究内容１）

導入で、近隣遺跡出土の中国銭を提示した。「当時の人が使っていたお金であること」、「私たちの身近な場所で出土したこと」から、児童の興味・関心を高められると考えた。児童は、「本物なんだ。」、「学校の近くにもあったんだ。」、「近くにも当時の人々が住んでいたんだ。」、「お金があるということは、当時もお店があったのかな。」などの意見・疑問がだされ、「中国のお金はどのように使われていたのか」という

課題に結び付いた。

②追究時に提示する資料の魅力（研究内容１）

課題提示後、「定期市のようす『一遍上人絵伝』を提示し、貨幣が使われている場面を探すことで課題を追究した。この時、ただ貨幣を使用している人物を探すことを目的とするのではなく、「どこで」、「だれが」、「何をしているか」を視点として与えることで、貨幣を介して行われていることに目を向けさせるようにした。これにより、「笠をかぶった女の人が布を見せている。その前の男の人がお金をもっている。布を買おうとお金を出しているところかな。」、「白布をかぶった女の人が布を差し出している。その前で店の女の人がお金を数えている。お店に布を売りに来たのかな。」と、貨幣の利用が物の売買に関するものであることを予想することができた。

指導案中の「深める」に位置付けた「貨幣経済の浸透」については、米と銭の交換比率を示し、同価値時の重さを知らせることで「貨幣の便利さ」に気付かせた。さらに、当時の世の中に急激に浸透していったことを、グラフを用いて知らせた。ねらいの達成のために必要な資料を順に提示することで、歴史学習未経験の４・５年生にとって思考の流れがスムーズとなり、歴史学習に対する興味・関心を喚起させることができたと考える。ただ、提示する資料が多いため児童の意識が分散し、焦点化しきれないおそれがあることから、提示する資料をさらに精選する必要がある。しかしながら、近隣の遺跡からの出土品を提示することや、発達段階に応じて資料を順に追究することは、歴史学習に対する興味・関心を高め、歴史を自分たちの身近なものとすることに極めて有効であると言える。（河合）

７　平成 27 年度の実践の成果と課題

平成 27 年度は、平成 26 年度に行った授業改善研究の成果と課題をもとに、出前授業を実施した。その結果、以下の成果と課題があげられる。

＜成果＞

・縄文時代の学習において、授業で取り上げる遺物を「食」に関わる石器に特化したことで、自らの生活経験と重ね合わせながら考える児童の姿につながった。また、実物の石器に触れることで、石器の特徴を根拠にしてその使い方や当時の生活などの社会的意味を追究することができたことから、児童生徒の主体的な取り組みを促すのに有効な教材であった。（研究内容１）

・近隣の遺跡で出土した遺物を持参して授業を行ったことで、児童生徒が強い関心をもち、意欲的に学習に取り組むことができた。各校の実態に応じて、時代ごと・地域ごとで資料を選択し、より身近な資料を開発したことで、児童生徒が歴史学習を自分たちの身近なものとすることができた。（研究内容１）

・授業のねらいを明確にして学習指導案を作成し、そのねらいに迫るための授業シナリオや板書計画を作成したことで、授業者が児童生徒に何を見つけさせるとよいかが明らかになり、適切な発問・助言につながった。また、その適切な発問・助言が本時のねらいに迫る児童生徒の姿につながった。（研究内容２）

・発達段階や学習形態に応じて学習活動を設定し、手で触れたり、視覚的に捉えたりできるように工夫したことで、児童生徒の関心を高めることができた。各校の実態に応じて、学級担任と連携して授業内容を吟味することや、提示する遺物や資料を精選することは、児童生徒の歴史学習に対する追究意欲を高

めたり、歴史的事象を適切に理解したりすることに有効であった。（研究内容２）

・児童生徒の思考の流れに沿った授業ノートを作成したことで、児童が学びの中での自らの考えの変容を実感することができた。また、授業ノートの中にイラストを位置付けたことは、観察したことを書き込んだり、矢印を使って事実を根拠にして考えをもったりする児童の姿につながり、児童の思考を助ける上で効果的であった。（研究内容３）

・土器を比較する学習では、土器の種類（名称）を伏せておき、色のついたシールを貼ることで、児童がその土器の特徴に着目して、その用途を考えることができた。児童の追究意欲を高めることや思考の流れをスムーズにすることに有効な手立てであった（研究内容３）。

＜課題＞

・「古墳時代」、「中世」の実践では、学習指導案と児童生徒の反応に差が見られた。特に、授業の流れや提示資料について改善点が多いことから、今年度の実践をもとに学習指導案の見直しを行い、児童生徒がより興味・関心をもてるように改善していく必要がある。（研究内容１・研究内容２）

・土器の新旧判別については、色の違いのみに着目して判断する児童生徒の姿が多く見られた。「土器を新旧判別する活動を通して、当時の人々の工夫や努力を捉えさせる」という授業のねらいに迫るために、授業者の発問を精査すること、形や質感に着目できる土器を選ぶこと、追究の視点を明らかにした上で活動に入ることなどの工夫が必要である。（研究内容２）

・授業者によって授業ノートの捉えにずれがあったことから、実際の授業の中で児童生徒の思考の流れを止めてしまう場面があった。授業ノートの活用方法について、職員間の意思疎通をさらに深め、授業のねらいに迫るための援助内容や授業ノートの工夫について検討する必要がある。（研究内容３）　（笠井）

８　おわりに

図 12・13は、平成 21 年度から平成 27 年度 12 月現在の出前授業実施校とその推移である。図 12 中の白抜き印で示した学校は平成 26・27 年度に新規依頼していただいた学校である。図 13 から、徐々にではあるが、確実に増加していることが分かる。

児童生徒は、「初めて土器を触って、たくさんの違いを見つけられて楽しかった。」、「昔の人の努力が見つけられてうれしかった。」、「自分たちの住んでいるところにも遺跡があるなんてびっくりした。」、「次は、違う時代のことを聞かせてください。」など、研究で取り組んできた成果が確実に表れた感想を送ってくれた。学校からの「専門性を生かしつつ、児童生徒たちのやる気を引き出し、ふるさとのよさを伝える素晴らしい内容だった。」、「地元で発掘された土器に驚

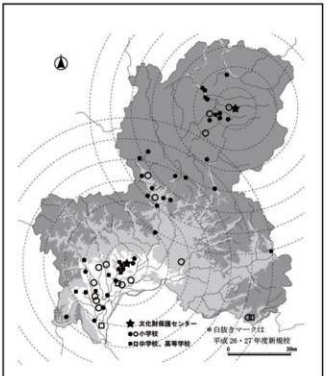


図 12　平成21～27 年度出前授業実施校位置図

くとともに、縄文時代から地域に人が暮していた事実にも驚きがあった。驚きが子供たちの学習意欲につながっていた。」、「つまずいた時のヒントの出し方やテンポよく進める展開で、児童生徒たちが集中して授業に取り組んでいました。」、「一度だけでなく、複数回授業をお願いしたい。」といった感想や、図14の実施校アンケート結果から、学校側のニーズにも十分対応できたのではないかと考える。

しかし、職員アンケートでは、「従前の授業より児童生徒の意欲的な姿が見られるようになった」と好感を得た半面、「近隣遺跡の遺物をもって行ったが、完形でなかったため、イメージさせにくかった。リストアップするとよい。」、「須恵器片の部位を統一すると、児童生徒の交流で共通理解がしやすい。」、「資料の量が多い、精査したい。」、「ねらいに即した意見に集約させきれなかったため、補助発問等を精査して導きたい。」など、細部には多くの課題がみられる。

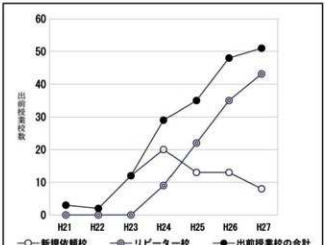


図13　平成21～27年度出前授業実施校の推移

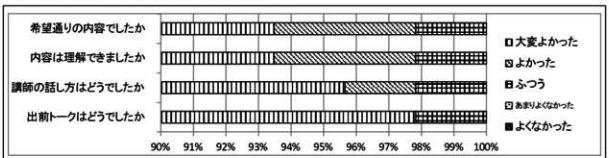


図14　平成27年度実施校アンケート回答結果

山梨県埋蔵文化財センターの出前授業では、土器焼きや火起こしなどの体験活動の重要性と、土器分類や拓本など見て触って考えることの大切さを提唱しつつ、小学校高学年だけでなく、低学年から中学年の好奇心旺盛な発達段階へのアプローチも有効であるとしている（野代2014）。今回、特別支援学級やクラブ活動の実践を行うことで、歴史学習を行っていない学年であっても、地域の歴史を学ぶ楽しさを味わうことができることが分かった。このことから、下学年の学習に対応できる指導の工夫も今後検討していく必要があろう。栃木県立博物館では、一単位時間の出前授業にとどまらず、単元全体を通した博物館と学校の連携を実践することで、収蔵資料の教材化と実践の場の確保が成果であるとしている。また、学校側も豊富な資料と専門的な知識を児童生徒に還元できたことは貴重な経験としている（加藤2014）。当センターも、今年度の実践で3時間分の出前授業を行った学級・学校があった。その際に学校側から「来年度は、ぜひ一単元を出前授業で行いたい。」と申入れがあり、単元を通した連携の検討も視野に入れていく必要があろう。

児童生徒たちが埋蔵文化財への興味・関心をもち、高めることができるような出前授業を実践していくために、成果を伸ばしつつ課題を克服し、さらに魅力的な出前授業となるよう、授業改善に今後も尽力し

ていきたいと考えている。 (河合)

＜参考文献＞

野代恵子　2014　「子どもたちに考古学の楽しさを！－出前授業の実践より－」『研究紀要 30』、山梨県考古博物館、山梨県埋蔵文化財センター

加藤正人　2014　「栃木県立博物館の博学連携実践報告－普及資料課の取組みから－」『研究紀要－人文－第 31 号』、栃木県立博物館

（別紙１）

授業改善研究構想図

授業改善研究グループ

岐阜県文化財保護センター設立目的

岐阜県内の埋蔵文化財の発掘調査及び研究、出土遺物の適切な保存及び活用、埋蔵文化財保護思想の普及を行い、もって本県文化の振興に寄与することを目的とする。

出前授業の実態

○指導案を確立し、職員全員が授業を実施できる状態にある。
○派遣される学校に合わせて資料を選定している。
○実物を手に取れるなど学校からの評価が高く、継続して依頼される。
●指導方法、指導案、地域教材の開発等、よりねらいに即した授業ができるよう改善が必要である。

普及活用事業の方向性

学校や博物館などの教育機関と連携し、出土品や調査成果を活用し、ふるさと教育を推進する。

目指す出前授業

・地域に即した教材を提示することで、より興味・関心を高められる出前授業。
・児童・生徒が「もっと知りたい」「もっと調べてみたい」と思えるような学習展開ができる出前授業。
・センター職員全員が適切に指導できる出前授業。

＜研究主題＞ふるさとの歴史に興味・関心がもてる出前授業のあり方

＜研究仮説＞
地域に応じた教材を開発し、その教材を指導案に位置づけ、指導方法を工夫すれば、学校や児童生徒に、ふるさとの歴史に興味・関心をもたせることができるのではないか。

１．教材開発

１）地域・時代に合わせた教材の開発
・県内を大きく６地域に分け、取り上げる遺跡・出土品を選定し教材化する。

２）授業展開に必要な資料作成
・開発した教材を資料化する。

２．指導案の改善

１）単元指導計画の作成
・指導要領・教科書とセンター作成学習指導案のねらいの一致及び単元への位置づけをする。

２）指導案の改善
・現在公開されている指導案を見直し、より興味関心がもてるような展開にする。

３）板書計画の作成
・指導案に即した板書計画を作成する。

３．指導方法の工夫

１）机間指導と指導・援助のあり方
・指導・援助の指導案への位置づけと、指導方法を明確化する。

２）授業ノートの作成
・１単位時間のノートを作成する。

評価方法

・授業後の児童・生徒の感想（学習ノート）
・授業後の各学校の感想（実施校アンケート）
・授業実施職員の報告（職員アンケート）

社会科授業指導案「縄文時代の人々のくらし」授業シナリオ

1　実施期日　平成○年○月○日（○曜日）　○時○分～○時○分
2　実施学年　○○※○○○学校○年生○名
3　授業者　学芸員担任　岐阜県文化財保護センター職員
4　本時のねらい
縄文時代のくらしについて、自分たちの住んでいる地域の遺跡から出土した「食」に関連する遺物（土器・石器）を観察し、その特徴から用途を考えることで、当時の人々の工夫や努力を知り、ふるさとの歴史に興味・関心をもつことができる。
5　展開

節	学　習　活　動	支　援	授　業　シ　ナ　リ　オ
つかむ 追究する まとめる 興味を高める	1　縄文時代について知っていることを交流する。 ・５５００年前（三内丸山遺跡）　・狩りや漁をしていた。 ・縄目のついた土器を使っていた。 2　課題をつかむ **縄文時代の石器は、どのように使われていたのだろう。** 3　縄文時代の石器を見たり触ったりしてどんな特徴があるのかつかみ、特徴をもとにどのように使用したかグループ毎に話し合う。 （1）特徴 ①打製石斧 ・周囲がぎざぎざにつくられている。 ・長方形の形になっている。 ・ものが切れるほど鋭くない。 ②打製石鏃 ・先が尖っている。 ・三角形で、突き刺さりやすそう。 ・側面が鋭く切れそう。 ③石錘 ・小さくて丸く、平たい石。 ・両端にくぼみがある。 ④磨石・叩き石 ・つるつるのところとくぼんでいるところがある。 ・ほかと比べてずいぶん重みがある。 ・打ちつけた痕がある。 （2）用途の予想 ①打製石斧 ・長辺を使って皮をはぐ道具。 ・スコップのように土を掘る。芋などを掘る。 ・平らなところでたたく。 ②打製石鏃 ・弓矢の先につける。 ・尖ったところで刺す。動物を狩る道具。 ・側面で切る。 ③石錘 ・ひもを引っかけて投げる道具。 ・アミの先端につける投網。 ・魚を捕まえる。 ④磨石・叩き石 ・堅い木の実をたたきつぶす。 ・こすって木の実をすりつぶす。 4　特徴と用途について全体交流する。 5　石器の特徴や用途から縄文時代の人たちの生活ようについてまとめる。 ・石の形、大きさ、種類などを考えて、目的に応じた使い方をしている。 ・生活をよりよくするために道具を工夫して生活している。 6　近隣の発掘調査遺跡について知る。 煮炊き用の大きい土器や食べ物を獲得する用途以外の石器を提示する。 7　まとめを書く。 縄文時代の人たちは、食べ物を得るためにいろいろな種類の石の道具を使い分けていることが分かった。当時の人々は、生活をより よくしていくために自分たちで道具をつくり、狩りや漁をして食料を手に入れていて、すごいと感じた。自分たちの住んでいる地域の近くにも、縄文時代の人たちが住んでいたことが分かり、地域の歴史に興味をもつことができた。この後に勉強する弥生時代のことも調べていきたい。	・児童のたくさんの意見を価値付けるとともに歴史学習に対する興味や関心を高める。 ・出土遺物を提示し、食生活につながる道具であることを伝える。 ・石器はグループに１セットを配布する。 ・触る時間をとり、感じたことや分かることを引き出し、石器の特徴をつかめるよう支援する。 ・机間指導の際に、形状・つくり・重量・石材など（根拠となる視点）に目を向けている児童を認める。 ・つまずいている児童には、「手都の食材」の資料を提示し、どの食べ物を得ることができそうか考え、自分の考えをもてるよう支援する。 ・使用方法について予想をした児童にはどうしてそのように考えたのか尋ね、根拠を明らかにできるよう支援する。 ・人々の工夫や努力に気付いた児童を意図的に指名し、板書に位置付ける。 ・遺物がどんな場面で使われていたかを明らかにするため想像図を提示する。 ・近隣の遺跡を紹介することで、児童がふるさとにも歴史があるということに気付き、歴史学習に対する興味や関心をもてるようにする。 ・児童が発表した言葉を使ってまとめる。	①「縄文時代」と隠して、ぱっと思いつくことを教えてください。（意見を簡単に板書する。） ②（児童の発言に対して）いろいろなことを知っていますね。今日は縄文時代の人たちの生活について勉強をします。 ③そこで、岐阜県の遺跡から実際に出土した石器をたくさんもってきました。これらの石器は、どれも縄文時代の人たちが食べ物を得るために使った道具です。縄文時代の人たちは、この石器をどのように使って生活をしていたのか考えてみましょう。 ④課題を書きます。ノートに書きましょう。（課題を書く。） ⑤今から皆さんに石器を配ります。２つの約束を守ってください。一つめは、縄文時代の人々が実際に使っていた大切な文化財です。大切に扱ってください。二つめは、鋭く尖ったり、ギザギザだったりするものもあります。けがをしないように注意深く扱ってください。では、配ります。（石器を配布する。） ⑥（打製石斧を見せ）このような石器を「打製石斧」と言います。（「打製石斧」と板書する。）ノートの頭の左上の空欄に書き入れましょう。習ってない漢字（「斧」を示す。）は「おの」と読みます。 ⑦（打製石鏃を見せ）このような石器を「打製石鏃」と言います。（「打製石鏃」と板書する。）隣の空欄に書き入れましょう。習ってない漢字（「鏃」を示す。）は「やじり」と読みます。 ⑧（石錘を見せ）このような石器を「石錘」と言います。（「石錘」と板書する。）ノートの頭の左下の空欄に書き入れましょう。習ってない漢字（「錘」を示す。）は「おもり」と読みます。 ⑨（磨石・叩き石を見せ）このような石器を「磨石」や「叩石」と言います。（「磨石・叩石」と板書する。）隣の空欄に書き入れましょう。習ってない漢字（「磨」を示す。）は「する」「みがく」と読みます。（「叩」を示す。）は「たたく」と読みます。 ⑩それぞれの石器を見たり、気を付けてさわったりして、石器の特徴をノートにたくさん書きましょう。その特徴からどのように使ったかを考えていけたらすばらしいです。時間は７分間です。考え学者合格ライン１０個以上です。（何が質問はありませんか。でははじめ。 ＊　子どもを見てまわる。一つまずいている子にはアやイのような声をかけるとよい。 ア：「ここはどうなってますか。」「さわったかんじはどうですか。」 イ：用途の予想が少ない場合は、「手都の食材」（センター所有パネル）を提示し、「どんな食べ物をとることができそうですか。」「どうやって。」とヒントを与える。全体でも、個人でもよい。 ＊石器を観察した意見に朱ペンで（○）、用途や生活を想像した意見に（◎）をつける。 ・いい意見を書いている子に「なるほど。」「すごいね。」「すばらしい。」などと声をかける。このとき、まわりに聞こえるくらいの声で。 ⑪（７分後）鉛筆を置きましょう。すばらしい意見がたくさんあったので、みんなで交流しましょう。４つの石器、どこからでもいいですよ。意見をどうぞ。 ＊授業者は原則うなずきだけで、板書に徹する。小さな声で「なるほど。」「そうか。」などはOK。 ＊発言が聞き取れないときは「もう一度お願いします。」でよい。 ＊机間指導で、あまり意見が書けていなかった子（観察事項のみなど）を先に指名し、ねらいに迫りそうな意見（想像事項が多いなど）を書いていた児童は、できるだけ後回しにする。 ＊想像の意見の子には、根拠を話させる。「打製石斧は○○だから、○○に使ったと思います。」など、根拠がない場合は「どうしてそう思ったのですか。」と聞き返していくとよい。 ⑫実際にこれらの石器を使っているときの写真を見せます。（児童が発言していない石器があるときは、写真を示して説明するとよい。） みなさんが考えたとおりでしたね。石器をよく観察して、その特徴から使い方をよく考えることができました。すばらしいです。 ⑬石器を観察し、使い方を想像したことから、縄文時代の人ってすごいなあと思ったことを教えてください。（聞く・色チョークで板書） ＊じっくりと考えさせる時間があれば、「工夫している」という考え方に対して「何のために？」と問うことで「自分たちの生活を豊かにするため」とつなげたい。 ⑭この学校の近くでも発掘調査が行われました。（事例の紹介：学校からどれくらいの距離、いつの時代の遺跡、調査成果） ⑮今日のまとめを書いて下さい。今日の授業で分かったこと、思ったことを書いて下さい。 ⑯今日はどうもありがとうございました。初めておじゃましましたが、（よかったところ）がとてもすばらしくて、また来たい気持ちになりました。最後に、（岐阜県文化財保護センターの今後の活動「タイムスリップ」「展示」「見学会」などを伝えて終了）です。

社会科授業指導案「弥生時代の人々のくらし」授業シナリオ

1　実施期日　平成○年○月○日（○曜日）　○時○分～○時○分
2　実施学年　○○☆○○○学校○年生○名
3　授業者　学級担任　岐阜県文化財保護センター職員
4　本時のねらい
縄文土器と弥生土器を比較し、それぞれの土器の特徴や、その変化について気付くことで、弥生時代の人々の生活の様式と土器の様式の変化が関係していることを知り、ふるさとの歴史に興味・関心をもつことができる。
5　展開

節	学　習　活　動	支　援	授業シナリオ
つかむ 追究する	1　縄文時代と弥生時代について、知っていることを交流する。 ・縄文時代は狩りを行っていた。昆虫がある。 ・弥生時代になって米作りが始まった。石臼了を使っていた。 ・三内丸山遺跡や吉野ヶ里遺跡が有名。 ・縄文土器や弥生土器を使っていた。 2　課題をつかむ。 **２つの土器にはどのような特徴があるのだろう。** 3　縄文土器と弥生土器を見たり触ったりしながら、それぞれの土器の特徴について、ノートにまとめる。 ○赤色シール（縄文土器） ・厚い。 ・はっきりした模様がある。 ・ざらざらしている。 ・砂粒が多い。 ・暗い色。 ・重みがある。 ・ぼろぼろ崩れる。 ・あまりじょうぶでない。 ○黄色シール（弥生土器） ・うすい。 ・模様がない（模様がうすい）。 ・つるつるしている。 ・砂粒が少ない。 ・明るい色。 ・比較的軽い。 ・かたい。 ・じょうぶ。 4　ノートの記述をもとに、見付けた特徴について全体交流する。 5　２つの土器の種別について、確認をする。 ※弥生土器は、弥生土器だと思う方を手に取り、手を挙げる。	・観点は問わず、自由に発言させる。 ・年表を用い、復旧的・感覚的に時代の流れをつかませる。 ・２つの時代の生活様式の違いや「米作り」というキーワードについて、板書に残しておく。 ・土器は一人二人ずつ観察を配布し観察させる。 ・実際に手に取らせ、「できるだけたくさん」という観点で、それぞれの特徴をつかませる。 ※後で様式の変化を考えさせるため、個人追究の時点では土器の種別は伏せ、シールの色で項目だけする。 ※形状・つくり・重量・材質等に目を向けている児童を認める。 ※特徴が顕著できるよう、机間指導時に考えを把握し、意図的に指名する。 ※土器の種別について発言する児童に対しては、その根拠を明らかにしながら発言させる。 ※視聴覚機器がある中、画面に映し出しながら発言させる。 ・「なぜ薄い土器になったのか」「模様がないのはなぜ」と補助発問し、（他やすい）「工夫した」など、生活の様式の変化と土器の様式の変化との関係について気付かせる。	①「縄文時代」「弥生時代」と聞いて、ぱっと思いつくことを教えてください。（意見を簡単に板書する） ②弥生時代は縄文時代の後の時代で、約６００年続いたのです。（年表を用いながら） ③今日は、遺跡から出土した弥生土器と縄文土器の２種類の土器をもってきました。どちらが弥生土器かは言いません。赤シールと黄色シールが貼ってあります。この２土器を比べて、弥生時代と縄文時代の土器の特徴や、土器がどのように変化したのかを見付け、弥生時代の人々の生活を想像していきましょう。（ノートを配布する） ④課題を書きます。（課題を書く） ⑤今から皆さんに２種類の土器を配りますが、今から言うのお来を必ず守ってください。この土器は、縄文時代と弥生時代の人々が実際に使っていた大切な文化財です。大切にやさしく扱ってください。では、配ります。（土器を配布する） ⑥土器の見ているところや違うところをできるだけたくさん見付けてノートに書きましょう。書きながら、どちらが弥生土器と思うか考えてみてください。どうして弥生土器と思ったのか理由もあとで聞きます。言えるとすばらしいですね。時間は７分間です。考古学者介格ラインは１０個以上です。何が質問はありませんか。（はいはい。（子どもたちを まわりながら赤丸をつけていく） ＊子どもをまわる。 ・何を書いたらよいか困っている子にはヒントを与える。「ここはどうなってる？」「さわったかんじはどうかな？」 ＊土器を観察した意見に○をつける。 ＊観察したことから当時の生活を想像した意見に◎をつける。 ・「なるほど」「すごいね」「すばらしい」「よく見付けたね」など、声をかけながら子どものノートを見ていく。このとき、まわりに聞こえるくらいの声で。 ⑦（７分後）鉛筆を置きましょう。すばらしい意見がたくさんあったので、みんなで交流しましょう。縄文土器の特徴でも弥生土器の特徴でもどちらかでもいいですよ。意見をどうぞ。 ＊授業者は原則うなずきだけで、板書に徹する。小さな声で「なるほど」「そうか」などはOK。 ＊発言が聞き取れないときは「もう一度お願いします」でよい。 ＊机間指導で、あまり意見が書けていなかった子（観察事項のみなど）を先に指名し、ねらいに迫りそうな意見（想像事項が多いなど）を書いていた児童は、できるだけ後回しにする。 ＊観察したことから、当時の生活を想像した意見の子には、根拠を話させる。「黄色のシールの方は、○○で○○に使ったと思うから、弥生土器だと思います。」など、根拠がない場合は「どうしてそう思ったのですか？」と聞き返してやるとよい。答えられなくてもよい。
まとめる 興味を高める	・遺物を見せながら、それがどんな場面で使われていたかを説明する。 ・近隣の遺跡を紹介することで、ふるさとにも歴史があるということに気づかせ、歴史学習に対する興味や関心をもたせる。 ・ねらいに迫るまとめをしている児童を意図的に指名する。	⑧それでは、どちらが弥生土器と思ったか答え合わせをしたいと思います。弥生土器だと思う方を右手に持って高く上げます。さんはい！（間を開ける）縄文土器の方が多いですね。正解は・・・・・・・・黄色シールが弥生土器です！ ⑨では、なぜ黄色シールが弥生土器だと思ったのか、理由を教えてください。（聞く・色チョーク で板書する） ＊「なぜ薄い土器をつくるようになったのだろう？」「模様がない土器が多いのはなぜ？」と補助発問をし、「土器の作り方を生活に合わせた」「生活に使いやすい」など、生活様式の変化があったことを知り、私たちと同じように、昔の人も「よりよい生活にしたい」という願いをもっていたことに気付かせる。 ⑩弥生時代になると、土器やその他の道具の種類が増えたのです（完形土器、パネルを提示しながら遺物の説明や用途を説明する。触らせてもよい）。これらの道具を見て、どんなことを感じましたか？ ⑪実は、この学校の近くにも弥生時代の人々が住んでいたことがわかっています。（事例の紹介） ＊学校からの距離、いつの時代の遺跡、調査成果など ⑫最後にノートの一番下に、弥生時代の人ってすごいなあと思ったことや、今日勉強になったなあということ、こんなことも知りたいなと思ったことを書きましょう。（２分くらいでさっとまとり、左のようなまとめを書いた二人くらいを指名して話させる） ⑬今日はどうもありがとうございました。初めておじゃましましたが、（よかったところ）がとても材どらいくて、また来たい気持ちになりました。最後に、（岐阜県文化財保護センターの今後の活動「タイムスリップ」「展示」「見学会」など）を伝えて終了）

社会科授業指導案「古墳時代の文化」授業シナリオ

1　実施期日　平成○年○月○日（○曜日）　○時○分～○時○分
2　実施学年　○○☆○○○学校○年生○名
3　授業者　学級担任　岐阜県文化財保護センター職員
4　本時のねらい

古墳時代について、自分の住んでいる地域（県内・市町村内・校区内　等）の遺跡から出土した弥生土器と須恵器を比較したり，古墳からの出土品を観察したりすることでその特徴をつかみ，土器製作技術の変化や大きな力をもつ人物の存在という視点から時代の移り変わりに気づき、ふるさとの歴史に興味・関心をもつことができる。

5　展開

節	学　習　活　動	友　　援	授　業　シ　ナ　リ　オ
つかむ 追究する 深める まとめる	1　古墳時代について知っていることを交流する。 ・各地に古墳がつくられた。 ・巨大な大仙古墳。 ・古墳のまわりにたくさんのはにわが並んでいた。 2　課題をつかむ。 **２つの土器にはどのような特徴があるのだろう。** 3　弥生土器と須恵器を見たり触ったりしてそれぞれの特徴をつかみ、特徴についてノートに書く。 **○黄色シール【弥生土器の説明部分】** **・模様がたて方向。** **・つるつるしている。** **・砂粒が少ない。** **・明るい色。** **・すり～っているところがある。** **・割れ目がまりかたそうでない。** **・平面がよくつくられている。** **○青色シール【須恵器の説明部分】** **・模様が横方向。** **・ざらざらしているところがある。** **・砂粒が黄色より少ない。** **・灰色。** **・すり減っていなくてかたそう** **・割れ目がかたい** **・曲げてあり、立体的なつくり。** 4　見つけた特徴について全体交流する。 5　どちらが新しい土器か、新しいと思う方を手に取り、手を挙げる（ここではじめて土器の種別名を知る）。 6　新しい土器（須恵器）と判断した理由について、根拠を基にして交流し、土器づくりが変化したことに気付く。 ・きれいで円形に近くなっていたり、かえりがついていたりするのは、細かな作業ができるようになったからじゃないかな。 ・かたくて丈夫な土器が作れるようになっているよ。 ・土器が壊れにくくなると、土器づくりの時間が少なくて、生活に余裕が出てくるんじゃないかな。 7　自分の住んでいる地域（県内・市町村内・校区内等）で見つかった出土品・写真・地図等から、古墳時代の社会の様子をつかみ、岐阜県内でも古墳を建造できる支配者層が存在していたことに気付く。 ・この石室におさめてあった須恵器は複雑で変わった形をしている。 ・鉄剣は長くて立派で、耳環はとてもきれいな色をしている。きっと身分の高い人の持ち物なんだろう。 ・これだけ大きくて立派な古墳が作れるのだから、すごく大きな力をもった人物が住んでいたのではないかな。 8　まとめ（感想） **須恵器は弥生土器に比べて、かたくて丈夫で、細かいかざりをもった土器だということが分かった。約５００年の間に、土器の作り方や生活の様子が大きく変わったんだと思う。また、こんなに大きな古墳が作れるくらい力をもった人物が、岐阜県にもいたんだな。自分たちの住んでいる地域にも古墳があることを、とても誇りに思う。どのくらい大きな力をもった人物がいたのか、もっと調べてみたい。**	・発言を板書する。古墳が作られるようになっていることをつかませる。 ・実物を持参したことを伝え、コンテナの中身に関心をもたせて課題設定する。 ・持参した２種類の土器が作られた時代を、年表で確認し、時間の流れをつかませる。 ・課題提示後、一人に１セットを配布し観察させる。 ・触る時間を少しずつ、感じたことや分かることを引き出し、それぞれの特徴をつかませる。 ※形状・つくり・色など目に目を向けている児童を認める。 ※見つけた特徴の根拠を明らかにしながら発言させる。 ※特徴が網羅できなら、根拠指導時に考えを整理して思考的に指名する。 ※視聴覚機器があれば、画面に映し出しながら発言させる。 ・古墳の調査について、絵や写真などを活用し、３段の調査状況をつかませることで、引きつける。 ・可能な限り近隣の遺跡を紹介し、ふるさとの歴史をより身近に感じさせ、今後の歴史学習に対する興味や関心をもたせる。 ・石室の大きさやつくり、出土品から、変化したかとして「大きな力をもつ人物」の存在に気付かせたい。 ・ねらいに迫るような書いている児童を意図的に指名する。	①「古墳時代」と聞いて、ぱっと思いつくことを教えてください。（意見を黒板に板書する） ②古墳時代は弥生時代の後の時代ではお４００年続いたといわれることが多いです。 ③今は昔、遺跡から出土した弥生土器と古墳時代の２種類の土器をもってきました。つくられた時代には約５００年間の開きがあります。どちらが新しい土器のほうでしょうか。黄色シールと青色シールが貼ってあります。二つの土器を比べてちがいを見つけ、古墳時代に登場した新しい土器は、弥生時代の土器と比べてどのように変わったのか想像してみましょう。（ノートを配布する） ④課題を書きます。（課題を書く） ⑤今から皆さんに２種類の土器を配りますが、今から言うお願いを必ず守ってください。この土器は、弥生時代と古墳時代の人々が実際に作った大切な文化財です。大切にやさしく扱ってください。では、配ります。（土器を配布する） ⑥土器の似ているところや違うところをたくさん見つけてノートに書きましょう。書きながら、どちらが新しい土器なのか考えてください。どうして新しいと思ったのか理由もあとで聞きます。言えるとすばらしいですね。時間は７分間です。考古学者合格ラインは１０個以上です。何分間聞けありませんが、でははじめ。（子どもたちをまわりながら赤丸をつけていく） ＊子どもをまわる。 ・つまずいている子にはヒントを与える。「ここはどうなってる？」「さわったかんじはどうかな？」 ＊土器を観察した意見に○をつける。 ＊観察したことから当時を想像した意見に◎をつける。 ・いい意見を書いている子（なるほど）「イコいね」「すばらしい」などと声をかける。このとき、まわりに聞こえるくらいの声で。 ⑦（７分後）鈴筆を置きましょう。すばらしい意見がたくさんあったので、みんなで交流しましょう。弥生土器の特徴でも新しい土器の特徴でもどちらからでもいいですよ。意見をどうぞ。 ＊授業者は原則うなずきだけで、板書に徹する。小さな声で「なるほど」「そうか」などはOK。 ＊発言が聞き取れないときは「もう一度お願いします」でよい。 ＊根拠指導で、あまり意見が書けていないかった子（観察事項のみなど）を先に指名し、ねらいに迫りそうな意見（想像事項が多いなど）を書いていた児童は、できるだけ後回しにする。 ＊観察したことから、当時を想像した意見の子には、根拠を話させる。「この土器は表面が○○だから、当時の人は○○のようにして作っていたと思います。」など。根拠がない場合は「どうしてそう思ったのですか？」と聞き返してやるとよい。 ⑧どちらが新しい土器と思ったか答え合わせをしたいと思います。新しい土器だと思う方を右手に持って高く上げます。さんはい！（間を開ける）青色シールの方が多いですね。正解は・・・・青色が新しい土器です！名前は「須恵器」といいます。ノートにそれぞれの名前を書きましょう（黄色シール側の空欄に弥生土器、青色シールの空欄に須恵器と書く）。 ⑨では、なぜ青色シールが新しい土器だと思ったのか、理由を教えてください。（聞く・色チョークで板書する） ・「ふかくて丈夫だと、どんなよいことがあるのだろう？」（立体的に作れるようになったのはなぜだろう？）と補助発問をし、「割れにくくて使いやすい」、「土器づくりの方法が変わった」など、生活や土器づくりの方法に変化があったことを知り、私たちと同じように、昔の人も「より良い生活にしたい」という願いをもっていたことに気付かせる。 ⑩古墳時代になると、日本全国で古墳がつくられるようになりますが、実は、この学校の近くにも古墳があったことがわかっています。これが古墳の写真で、石室から出土したものはこれらです。（見せる・説明する必要なさそう）写真や出土したものを見て、どんなことを感じましたか？ ＊「なぜこの石室からこのようなものが見つかるのだろう？」「このようなお墓を作れる人はどんなんだったのだろう？」と補助発問をし、このあたりにも大きな力をもつ人物がいた可能性に気付かせたい。 ⑪最後にノートの一番下に、古墳時代のことで今日勉強になったなあということ、こんなことも知りたいなと思ったことを書きましょう。（２分くらいでさっときめり、左のようなまとめを書いた三人くらいを指名して話させる） ⑫今日はどうもありがとうございました。初めておじゃましましたが、（よかったところ）がとてもすばらしくて、また来たい気持ちになりました。最後に、（岐阜県文化財保護センターの今後の活動「タイムスリップ」「展示」「見学会」などを伝えて終了）

（別紙５）

社会科授業指導案「奈良時代から平安時代の道具と国づくり」授業シナリオ

1　実施期日　平成○年○月○日（○曜日）　○時○分～○時○分
2　実施学年　○○※○○学校○年生○名
3　授業者　学級担任　岐阜県文化財保護センター職員
4　本時のねらい
縄文時代から平安時代までの４種類の土器の新旧を考える活動を通して、土器製作技術の移り変わりから時代の変化に気づく。また、地域における古代寺院や役所等の古代の発掘調査事例から中央とつながりがあったことを知り、ふるさとの歴史に興味関心をもつことができる。
5　展開

過程	学習活動	支援	授業シナリオ
つかむ	1　これまで学習した時代についてふりかえる。 ・縄文時代は狩りや採集をしてくらしていた。 ・弥生時代は、米作りをしていた。 2　課題をつかむ。 **４つの土器を古い順に並べよう。**	・時代をおおまかにイメージできる程度でよい。 ・年表を提示し、時代の流れを視覚的につかませる。 ・個意事項を説明し、土器片セットを班ごとに配る。	①　（［　　］時代　のカードを見せ）いままでの学習のおさらいです。［　　］に当てはまる言葉はなんですか。 ②　（つづいて）それぞれの時代の特徴を教えてください。 ③　今日は、昔の人々のくらしぶりを知るために、４種類の土器を持ってきました。（年表を使って）縄文時代の土器、弥生時代の土器、古墳時代から奈良時代の頃の土器、平安時代の頃の土器の４種類です。（ノートを配布する。） ④　課題を書きます。（課題を書く。） ⑤　今から皆さんに４種類の土器を配ります。どの土器も昔の人が実際に使っていた文化財です。大切にやさしく扱って観察してください。では、配ります。（土器を配る。）
追究する	3　土器を古い順に並び替え、その理由をノートに書く（視点：色、手触り、模様、形、材質、重さ等）。 縄　縄文土器 ・分厚くて、模様がある。他の土器と比べて古そう。 弥　弥生土器 ・うすい茶色。土の感じが青や緑とは違う。 須　須恵器 ・灰色で少しざらざらしている。　・分厚くて硬そう。 瓦　灰釉陶器 ・白くて、すべすべしている。　・薄くて硬い。大丈夫？。 ・高台がついている。今の食器に似ている。	・古い順に並べるための視点を確認する。 ・並び替えられない児童生徒には、「一番古そうなのは？」と問い、考えを促す。 ・土器を古い順に並べた児童生徒には、「どうしてその順番に並べたのか？」と問い、その根拠を明らかにさせる。 ・根拠を明らかにして個目を考えている児童生徒を認める。 ・板書計画に基づいて構成的に板書する。 ・土器の変化から時代が変わったことを捉えられるようにする。	⑥　４種類の土器を比べて、古い順に並べてみましょう。どんなところに注目すると並べられそうですか（視点を確認する）。どうしてそのように並べたのか理由も書きましょう。時間は７分間です。何か質問はありませんか。でははじめ。 ※子どもを見て回る。つまずいている子どもにヒントを与える。「どんな色をしているかな」「触った感じはどうかな」など。 ※観察したことには◎をつける。観察したことから何に使ったものかを考えている意見には◎をつける。 ⑦　（７分後）鉛筆を置きましょう。皆さんが発見したことを交流したいと思います。発表してください。 ※児童生徒が発言したことを板書計画に基づいて、キーワードを板書する。 ※あまり意見が分けてなかったチを先に指名し、時代の予想などがはずれている子はできるだけ最後の方にあてる。 ※授業者は原則うなずきだけでよい。小声で「なるほど」「そうか」などはOK。 ※使い方や時代の予想をした子どもには、その根拠を話させる。 ⑧　それでは、答えを実際の土器を提示しながら発表したいと思います。 （縄文土器を見せながら）一番古いのはこの土器です。（弥生土器を見せながら）２番目に古いのはこの土器です。 （須恵器を見せながら）３番目はこの土器です。（灰釉陶器を見せながら）この中で一番新しいのはこの土器です。 それぞれ皆さんがもっている緑、赤、青、黄のどの土器か分かりますか。（それぞれの土器を指差して、色をつぶやかせる。）答えは「赤→黄→青→緑」となります。観察したことをもとに考える皆さんの姿こそ、考古学の第一歩なのです。（拍手） ※正解だったかではなく「根拠をもとに考えられたこと」を価値づける。
深める	5　自分の住んでいる地域で見つかった出土品・写真・地図等から中央とつながりがあったことを知る。 ・（円面硯から）黒くなっているところがある。墨を使って文字を書いていたのかな。 ・（墨書土器から）土器に墨で文字が書かれている。何のために書いたのだろう。 ・（瓦や仏具から）お寺に関係していそうだ。今のお寺にあるものと似ている。 ・県内にも都（中央）とつながりのある役所がつくられた。当時の国づくりのしくみを守る役人がいたんだな。 ・奈良時代に県内に古代寺院ができたんだ。都（中央）だけでなく県内でも仏教が広まっていたんだな。	・近隣の遺跡を紹介することでふるさとにも歴史があるということに気づかせ、歴史学習に対する興味や関心をもたせる。 ・古代寺院の分布図を提示し、県内にも多くの古代寺院が置かれたことを確認する。 ・中央とのつながりについてつかませるために役所の役割について等の説明を行う。 ・古代寺院がたくさんあったー仏教が広まっていたことを促えさせる。 ・おらに迫るまとめをしている児童を意図的に指名する。	⑨　（円面硯を見せながら）この道具は、何に使ったものかな。 ※あまり意見が分けてなかったチを先に指名し、時代の予想などがはずれている子はできるだけ最後の方にあてる。 ※授業者は原則うなずきだけでよい。小声で「なるほど」「そうか」などはOK。 ※使い方や時代の予想をした子どもには、その根拠を話させる。 ⑩　それでは、答えを実際の土器を紹介しながら発表したいと思います。 （縄文土器を見せながら）一番古いのはこの土器です。（弥生土器を見せながら）２番目に古いのはこの土器です。 （須恵器を見せながら）３番目はこの土器です。（灰釉陶器を見せながら）この中で一番新しいのはこの土器です。 それぞれ皆さんがもっている緑、赤、青、黄のどの土器か分かりますか。（それぞれの土器を指差して、色をつぶやかせる。）答えは「赤→黄→青→緑」となります。観察したことをもとに考える皆さんの姿こそ、考古学の第一歩なのです。（拍手） ※正解だったかではなく「根拠をもとに考えられたこと」を価値づける。 ⑪　（奈良時代から平安時代の遺跡を紹介する。）実は、みなさんの学校の近くにも奈良時代から平安時代のころに人が生活していた跡が見つかっています。今日、紹介するのは「○○遺跡」です。（パネルを提示し、位置を確認する）この遺跡の発掘調査で見つかった遺物を紹介します。（円面硯、墨書土器、瓦、仏具などその遺跡を特徴付ける遺物を紹介する） ※気づいたことや疑問に思ったことを交流して、その頃の様子を想像する。今の生活と比べてみてもよい。 ⑫　例１：「○○遺跡」は当時の役所だったと考えられています。周りには国府や郡衙とよばれる役所があって、その地域を治めていました。国府には都から国司が派遣されて、その地域の税を管理する等の仕事をしました。（小学生には難しい内容なので教科書に載っている律令制などとつなぎて説明することで理解を図る） ※「役所で集められた税はどうなったのかな」と補助発問を行い、役所の役割から中央とのつながりを捉えられるようにする。 例２：「○○遺跡」からはお寺に関する遺物がたくさん出土したことから当時はお寺があったのではないかと考えられています。実は、発掘調査やさい資料などからその他にも当時の岐阜県にはお寺があったことが分かっています。いくつくらいお寺があったと思いますか（反応を見る）。これは奈良に東大寺が造られた頃に岐阜県にあった お寺の分布図です。（古代寺院の分布図を提示する）。ぱっと見て気づくことを教えてください。 ※「お寺がたくさんあったということから当時の様子を想像できないかな？」と補助発問を行い、「岐阜県でも仏教が広まっていたこと」を捉えさせる。都でも仏教が広まっていたことを想起させ、中央とのつながりを捉えさせる。 ⑬　それでは、今日の授業のまとめをしましょう。 ※まとめが書けない子に助言する。「土器を比べてみてどんなことがわかったかな。」「どんなことが心に残ったかな。」 ※児童生徒のノートを確認して回り、ねらいにせまるまとめを書いている１、２名の児童を指名して発表させる。 ⑭　本日は、ありがとうございました。質問などあるテは、後から聞いてください。文化財保護センターまで問い合わせてもらってもかまいません。センターでは、発掘を体験できるイベントを実施しております。ぜひ参加してみてください。
まとめる	6　まとめを書く。 **時代が新しくなるにつれて、土器をつくる技術が進歩して、丈夫で軽いものになっていったのだな。土器の変化からも時代の変化が感じられておもしろい。また、この ころは都だけではなく岐阜県にもお寺が造られたり、役所が造られたりした。これまで学んだ都の様子と似ているところがあって、その影響が岐阜県にもあったことが分かった。近くの遺跡についてもっと知ってみたい。**		

社会科授業指導案「日本で使われた中国の貨幣と商業経済の発達」授業シナリオ

1　実施期日　平成○年○月○日（○曜日）　○時○分～○時○分
2　実施学年　○○立○○○学校○年生○名
3　授業者　学級担任　岐阜県文化財保護センター職員
4　本時のねらい
　地域の遺跡から出土した遺物（古銭）の観察やその使われ方を考える活動を通して、鎌倉時代に中国との貿易によって多くの銭貨が日本に流入し、貨幣として使われたことを理解し、商売がさかんになったことに気づくことができる。また、地域から出土した遺物を通して学ぶことで、ふるさとの歴史に関心をもつことができる。
5　別図

節	学　習　活　動	支　援	授　業　シ　ナ　リ　オ
つかむ	1　遺跡から出土した古銭を提示して、気づいたことを交流する。 ・丸い、真ん中に穴が開いている。昔のお金だ。 ・４つの漢字（未元通宝など）が書かれている。 2　中国のお金であること、日本の遺跡から大量に出土していることを知り、課題づくりをする。 **中国のお金は、日本でどのように使われていたのだろう。**	・古銭を触る時間をとり、感じたことを分かったことを引き出す。 ・発言を板書に位置づけて、内容を確認する。 ・大量の古銭が一度に出土した様子を写真資料で示す。	①　（授業ノートを配布しておく）これは○○遺跡から出土したものです。これからみんなにも見てもらいたいと思います。１つだけ約束があります。昔の人々が実際に使っていた大切な文化財です。大切に扱ってくださいね。配ります。（古銭を配布する）１分間、よく観察してみてください。１分たったら気づいたことを発表してもらいます。（１分間経ったら）思いつくことを教えてください。（意見を簡単に板書する）
追究する	3　「定期市のようす」をもとに、古銭が使われている場面（２ａ所）を探し、○をつける（研究ノート）。 ・笠をかぶった女の人が布を見せている。その前の男の人がお金をもっているから、布を買おうとお金を出しているところだと思う。 ・白布をかぶった女の人が店の前で布をさし出していて、店の人がお金を数えているから、布を売りにきたところだと思う。 　→中国のお金を使って、ものの売り買いが行われている。貨幣として使われていたんだ。	＊古銭が使われている場面が見つけられない４時は、貨幣のたば（資料）を示す。 ＊当時のお金の価値についても説明できるようにしておく。 ＊当時の日本の貨幣鋳造や「富本銭」や「和同開珎」についても、説明できるようにしておく。 ＊児童生徒が、貨幣を使って取引をすると便利であることが実感できるように、補助資料を活用して具体的な場面で考えられるようにする。	②　（昨日出てもらった。）今日は、中国のお金を使っていた頃の人々暮らしを見ていきましょう。今から、800年ほど前の日本では、中国のお金を使ってものの取引が行われていたのだね。 ③　せっかくだから、中国のお金が日本に入ってくる前のことも考えてみましょう。それまでは、どのようにものの取引が行われていたのでしょう。（しばらくふせかせて、資料を示す。）米や布がお金の代わりに使われていました。奈良時代には税として米や布などを納める租や調という仕組みがあったね。それをふまえて、なぜ日本で貨幣がたくさん使われるようになったのでしょうか。 （すぐには、反応がない場合もあるが、しばらく時間をとって考えさせたい。その理由について、考えられる（説明できる）児童生徒がいたら、「教えて」と促し、説明してもらう。） 【補助資料を使って考える】米１俵（10 kgの米袋を示し、「これを６袋分」は、当時の貨幣 400 枚と同じ価値がありました。だから、これまでは60 kgのお米をもって行って買っていたものも、1.3 kg分の貨幣をもっていけば買えるようになったね。具体的な場面で考えてみると、馬を買う場合、当時の貨幣で2000 枚必要でした。重さは９（児童生徒に言わせる）もし、これをそれ以前のように、米を使って買うと？　どちらの方が便利だろう。
興味を高める	5　学校周辺地域（もしくは県内）の遺跡でも、古銭が出土していることを知り、岐阜県内でも中国銭が貨幣として使用されていたことを実感する。また、銭貨と同じく貿易によって商品として流通していた中国の陶磁器やものの売買等に使用されていた大甕・擂鉢等の遺物に触れ、商売が行われていたことを実感する。 ・この近くでも中国のお金を使ってものの売買が行われていたのだな。 ・私たちの住んでいる地域も含め、多くの地域で中国との貿易で輸入したお金が使われていたんだな。	・近隣の遺跡を紹介することで、ふるさとにも歴史があるということに気づかせ、歴史学習に対する興味や関心をもたせる。	⑧　中国のお金は不銭（不のお金）だけで約2000 倍枚日本に輸入されたと言われています。（染クイズ形式でいい）それが日本各地に広がり、貨幣としても取引の時に使われました。今、みんなはお金を使ってものを買っているけど、お金を使ってものの取引が行われるようなの仕組みは近くなったのは、この頃だったんだね。 ⑨　この学校の近くでも発掘調査が行われました。（事例の紹介）学校からどれくらいの距離。いつの時代の遺跡、調査成果など （写真提示する遺物は、古銭、中国の陶磁器がよい。擂鉢、大甕は遺跡にも描かれていることから提示したい。
まとめる	7　まとめ（感想） 中国との貿易でたくさんの銭貨が入ってきたことで、それが日本でも貨幣として使われるようになったんだ。それまでと比べてものの売買がしやすくなったことで、さかんに商売が行われるようになり、町では定期市も開かれるようになったのだな。今では、私たちも当たり前のようにお金を使ってものを買っているけれど、その始まりは中国のお金がきっかけだったなんて面白いなと思った。さらに、私たちの住んでいる近くの人たちも同じように古銭を使ってものの売り買いをして生活をしていたことを知って、当時の人たちの生活の上に今の私たちの生活があることが分かった。	・ねらいに迫るまとめをしている児童を意図的に指名する。	⑩　最後に、ノートの一番下に感想を書きましょう（２分くらいでまわり、左のようなまとめを書いた２人くらいを指名して話させる） ⑪　今はどうもありがとうございました。初めておじゃましましたが、（よかったところ）がとてもすばらしくて、また来たい気持ちになりました。最後に、（岐阜県文化財保護センターの今後の活動「タイムスリップ」「展示」「見学会」などを伝えて終了）

社会科学習指導案「土器を比べてみよう」授業シナリオ

1　実施期日　平成○年○月○日（○曜日）　○時○分～○時○分
2　実施学年　○○市立○○学校○年生○名
3　授業者　学級担任　岐阜県文化財保護センター職員
4　本時のねらい
縄文時代から中世までの土器を観察し、それぞれの特徴をとらえる活動を通して、土器製作技術の変化やそれに携わる人々の工夫に気付き、歴史学習や郷土の歴史への興味・関心をもつことができる。
5　展開

節	学習活動	支援	授業シナリオ
つかむ	1　これまで学習した時代についての復習をする。 ・縄文時代は狩りや採集。・弥生時代は、米作り、車弥呼。 ・古墳時代は、大きな墓・埴輪・奈良時代は、仏教、聖徳太子。 ・平安時代は、貴族、藤原道長。・鎌倉時代は、武士、源頼朝。 2　課題をつかむ。 **４つの土器を古い順に並べよう。**	・時代をおおまかにイメージできる程度でよい。 ・土器片セットを班ごとに配る。 ・配布前に、留意事項を説明する。 ・基本的には個人追究だが、感じたことや分かったことを小グループで交流しながら、遺物の特徴をつかませてもよい。	①　（[　　]時代」のカードをバラバラに掲示しておき）占い順序にカードを並べてみましょう。 ②　（つづいて「４つの土器」の時代に関わるカード順番に指して）このころの時代の特徴を教えてください。 ※ここまでを３分程度の復習内容とし、③以降の時間を十分確保する。 ③　今日は、今みなさんが教えてくれた時代の土器を持ってきました。この「４つの土器」を比べて、技術がどのように変化したか特徴を見つけ、４つの土器を古い順に並べてみましょう。（ノートを配布する。） ④　課題を書きます。（課題を書く。） ⑤　今から班に１セットずつ「４つの土器」を配ります。どの土器も昔の人が実際に使っていた文化財です。大切にやさしく扱って観察してください。では、配ります。（土器を配る。）
追究する	3　それぞれの土器を観察し、特徴や使い方の予想をノートに書く。（色、手触り、模様、形など） （１）特徴 縄　山茶碗 ・白い、すべすべ。 ・薄い、硬い。現代の食器に近い。 赤　縄文土器 ・黒っぽい。焦げている。ざらざら。 ・分厚い。割れそう。模様がある。 青　須恵器 ・灰色、ざらざら。 ・分厚い。硬そう。模様がある。 黄　弥生土器 ・うすい茶色。さらさら。 ・薄い。赤より硬い。模様がある。 （２）使い方の予想 縄　山茶碗 ・食器みたい。黄族が使いそう。 ・お寺でお坊さんがお供えした。 赤　縄文土器 ・火にかけて煮炊きした。 ・縄文がある。縄文土器だ。 青　須恵器 ・赤や黄より硬い土器。新しい。 ・割れにくいから、保存用に使う。 黄　弥生土器 ・薄く軽い。作るのが難しそうだ。 ・硬さから赤と青の間の時期かな。	・板書計画に基づいて構造的に板書する。 ・班で順序を検討し、全体交流する。 ・「技術の変化」「昔の人々の工夫」に注目させるために「どうしてその順番に並べたのか？」「なぜ土器を変えていったのか。」などと問い返し、「人々の工夫」に集約していく。 ・説明が長くならないように留意する。 ・郷土の歴史に興味がもてるように工夫する。 ・土器の観察が細かくできたことを認め、一つのもの（遺物）からたくさんの情報が分かる楽しさを伝える。	⑥　それでは、グループで交流しながら茶、赤、青、黄を古いほうから順番に並べるとどうなるでしょう。自分の意見だけでなく仲間の意見も参考にして、並べてください。（意見がまとまった班から、代表が黒板に順番を書く。） ※班ごとの並べ方を比較し、共通点や相違点等について理由を問う。 ※技術が変化していることや当時の人々の工夫に集約する。 ⑦　それでは、完全な形になっている土器を見て答え合わせをしましょう。 （縄文土器を見せながら）一番古いのはこの土器です。（弥生土器を見せながら）２番目に古いのはこの土器です。 （須恵器を見せながら）３番目はこの土器です。（山茶碗を見せながら）この中で一番新しいのはこの土器です。
深める	4　観察したことについて全体交流し、並べ方を交流する。 5　それぞれの時代の完形品と比べて並べ方の答え合わせをし、土器の製作技術の変化、人々の工夫について考える。 ・古い順に並べると「赤→黄→青→茶」になるのだな。 ・縄文土器（弥生土器）は黒ずむあるから煮炊きに使ったんだ。 ・縄文土器から山茶碗を比べるとどんだん現代のものに似てきている。 ・時代が新しくなると、だんだん土器が丈夫で、軽く、使いやすそうなものになっている。 ・技術が変化したのは、昔の人々が生活を良くするために工夫したからだ。 6　近隣の発掘調査遺跡について知らせる。	・板書計画に基づいて構造的に板書する。 ・班で順序を検討し、全体交流する。 ・「技術の変化」「昔の人々の工夫」に注目させるために「どうしてその順番に並べたのか？」「なぜ土器を変えていったのか。」などと問い返し、「人々の工夫」に集約していく。 ・説明が長くならないように留意する。 ・郷土の歴史に興味がもてるように工夫する。 ・土器の観察が細かくできたことを認め、一つのもの（遺物）からたくさんの情報が分かる楽しさを伝える。	⑧　それでは、完全な形になっている土器を見て答え合わせをしましょう。 （縄文土器を見せながら）一番古いのはこの土器です。（弥生土器を見せながら）２番目に古いのはこの土器です。 （須恵器を見せながら）３番目はこの土器です。（山茶碗を見せながら）この中で一番新しいのはこの土器です。 ⑨　それぞれ皆さんがもっている茶、赤、青、黄の土器のかけらは、完全な形の土器のどれと似ているでしょうか。（それぞれの完形土器を指差して、色をつぶやかせる。）答えは「赤→黄→青→茶」となります。答え合わせをして、新たに発見したことや疑問に思ったことなどはありますか。（間違えた班に対して）実はこうしたまちがいは、専門家でもあることです。私たちも土の中から出てきたときに迷うことがあります。しかし、実物をじっくり観察し、人とは違った視点で考えてみることも大切だと思います。どの班も、観察したことをもとによく考えて並べることができました。（拍手）
まとめる	7　まとめを書く。 **人々が日ごろ使う土器は、時代によってさまざまな変化をしてきたんだな。時代が新しくなるにつれて、かたくて軽いものになっていき、土器の種類も増えて、技術が変化しているのが分かった。昔の人々が自分たちの生活をよくするために工夫してきたから、今の私たちの生活があるんだな。地元からもたくさんの土器が出ていることを初めて知った。地域にある遺跡についてもっと調べてみたい。**		⑩　実はこの土器の中に、この地域で出土した土器があります。（事例の紹介） ※話が専門的になりすぎないように留意する。 ※地元に何年も前から生活をしていた人がいたという事実と当時の人々の生活ぶり（工夫、身分等）などが分かるとよい。 ⑪　それでは、今日の授業のまとめをしましょう。 ※まとめが書けない子には、助言する。「土器を古い順に並べてみてどんなことがわかったかな。」「お話を聞いてどんなことが心に残ったかな。」 ※子どものノートを確認して回り、ねらいにせまるまとめを書いている１、２名の児童を指名する。 ⑫　本日は、ありがとうございました。質問などあるオは、後から聞いてください。文化財保護センター宛てに問い合わせてもらってもかまいません。センターでは、発掘を体験できるイベントを実施しております。ぜひ参加してみてください。

岐阜県文化財保護センター

研　究　紀　要

第２号

２０１６年6月１日

編集・発行　岐阜県文化財保護センター
岐阜市三田洞東 1-26-1